

IBM Campaign
バージョン 9 リリース 0
2013 年 2 月

インストール・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、117 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Campaign バージョン 9 リリース 0 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Campaign
Version 9 Release 0
February, 2013
Installation Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1998, 2013.

目次

第 1 章 IBM Campaign のインストールの準備	1
IBM Campaign インストールのチェックリスト	1
Campaign を他のシステム・コンポーネントと共にインストールする	3
前提条件	4
システム要件	4
知識要件	5
クライアント・マシン	5
アクセス権限	5
Marketing Platform の要件	6
JAVA_HOME 環境変数の確認	6
eMessage と Campaign の統合	6
eMessage 構成について	7
eMessage レポートの要件	7
第 2 章 IBM Campaign のデータ・ソースの準備	9
ステップ: Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する	9
ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する	10
ステップ: JDBC ドライバーの Web アプリケーション・サーバーを構成する	10
ステップ: Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する	11
JDBC 接続を作成するための情報	12
IBM Campaign データベース情報チェックリスト	14
第 3 章 IBM Campaign のインストール 15	
すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報	15
IBM サイト ID	16
IBM EMM インストーラーの機能	16
インストーラー・ファイルの単一ディレクトリ要件	16
製品インストール・ディレクトリの選択	17
インストール・タイプ	17
インストール・モード	17
無人モードを使用して複数回インストールする	18
IBM Campaign コンポーネントの選択	19
IBM Campaign Reports Package のインストール	20
Campaign での eMessage のインストールについて	20
eMessage コンポーネントがインストールされる場所	21
ステップ: IBM インストーラーを入手する	22
手順: IBM EMM インストーラーを実行する	23
インストール・ウィザード内の移動	24
データベース環境変数	24

インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成する方法 25

第 4 章 配置前の IBM Campaign の構成	27
ステップ: 手動で Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加する (必要な場合)	27
手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)	28
ステップ: Campaign を手動で登録する (必要な場合)	29
手動による eMessage の登録 (必要な場合)	30
ステップ: Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)	31
データベース環境変数およびライブラリー環境変数 (UNIX)	31
第 5 章 IBM Campaign Web アプリケーションの配置	35
ステップ: Web アプリケーションのセッション・タイムアウトを設定する (オプション)	35
WebSphere Application Server への IBM Campaign の配置	35
WAR ファイルから WebSphere Application Server 上に IBM Campaign を配置するには	36
EAR ファイルから WebSphere Application Server 上に IBM Campaign を配置するには	37
WebLogic への IBM Campaign の配置	39
WebLogic 11g の場合の追加ステップ	40
すべてのバージョンの WebLogic での UNIX システムに関するレポート	40
ステップ: Campaign サーバーを始動する	41
Campaign サーバーを直接始動するには	41
Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法	41
第 6 章 配置後の Campaign の構成	43
ステップ: Campaign リスナーが稼働していることを確認する	43
ステップ: Campaign システム・ユーザーをセットアップする	43
ステップ: 「構成」ページでデータ・ソース・プロパティを追加する	44
データ・ソース・テンプレートをインポートするには	45
データ・ソース・テンプレートを複製するには	45
ステップ: 「構成」ページで必須 Campaign プロパティを設定する	46
ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する	46
ステップ: 追加プロパティを設定する	47

ステップ: Campaign のユーザー・テーブルをマップする	47
ステップ: Campaign インストールを確認する	47
ステップ: IBM アプリケーションを統合する場合のオプションの構成を行う	48
ステップ: IBM Marketing Operations との統合のためのプロパティを設定する	48
ステップ: eMessage を統合するための起動プロセスを開始する	48

第 7 章 Campaign での複数のパーティションの構成 51

パーティションの利点	51
パーティションのユーザー割り当て	51
パーティション・スーパーユーザー	52
パーティションのデータ・アクセス	52
複数のパーティションのセットアップ	52
複数のパーティションを構成する場合の前提条件	52
パーティションのデータ・ソースの準備	53
パーティションのシステム・テーブルの作成とデータの追加	53
追加パーティションごとのディレクトリー構造の作成	53
デフォルト・パーティションを複製するには	53
新しいパーティション構造の作成	54
パーティションのデータ・ソース・プロパティの構成	54
システム・ユーザーのセットアップ	56
複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの構成	57
複数のパーティションを使用する場合の次の手順	57

第 8 章 eMessage での複数のパーティションの構成 59

eMessage のパーティションの作成手順	59
IBM eMessage のパーティションについて	60
eMessage のパーティションの重要な特性	60
Campaign のパーティションとの関係	61
eMessage 内の複数のパーティションに関する要件	61
ステップ: eMessage の新しいパーティションを作成する	62
ステップ: パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する	63
パーティション・スキーマ内の eMessage テーブルの作成とデータの追加	63
手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)	64
パーティションのシステム・テーブルへの自動アクセスの構成	65
パーティションのシステム・テーブル特性の指定	66
ステップ: IBM EMM Hosted Services へのパーティション・アクセスを構成する	66
IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザー	67
ステップ: 新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする	67

ステップ: パーティションの RLU の場所を指定する	67
ステップ: システム・コンポーネントを再始動する	68
ステップ: パーティションの構成および接続をテストする	69
複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの構成	69

第 9 章 Campaign のアップグレード . . . 71

すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件	71
アップグレードの順序	72
IBM Campaign アップグレード・シナリオ	73
eMessage のアップグレードに固有の準備	75
既存の eMessage インストール済み環境のアップグレード	75
eMessage アップグレードのスケジューリング	76
全受信者リストのアップロードの完了	77
アップグレード中のアウトバウンド E メール配信について	77
アップグレード中の E メール・レスポンスについて	77
Campaign 8.5 または 8.6 からのアップグレードのステップ	77
構成設定のエクスポート (オプション)	78
Campaign のバックアップ	79
レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの停止	79
Campaign の配置解除	80
メモリーからの未使用ファイルのアンロード (AIX のみ)	80
アップグレード・モードでの Campaign インストーラーの実行	81
Web アプリケーション・サーバーへの Campaign の再配置	81
レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの再始動	81
SQL アップグレード・スクリプトの確認と、必要に応じた変更	82
Campaign 9.x の環境変数の設定	83
アップグレード・ツールを実行するために必要な情報の収集	85
アップグレード・ログについて	85
パーティションのアップグレードについて	85
Campaign 9.x アップグレード・ツールの実行	86

付録 A. IBM ユーティリティ 89

Marketing Platform ユーティリティについて	89
configTool ユーティリティ	91
alertConfigTool ユーティリティ	95
datafilteringScriptTool ユーティリティ	95
encryptPasswords ユーティリティ	97
partitionTool ユーティリティ	98
populateDb ユーティリティ	100
restoreAccess ユーティリティ	101
scheduler_console_client ユーティリティ	103
RCT スクリプト	105
MKService_rct スクリプト	106

付録 B. IBM Campaign のフェイルオーバー構成 109

付録 C. IBM 製品のアンインストール 113
IBM 製品をアンインストールするには 113

IBM 技術サポートへの連絡 115

特記事項 117

商標 119

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項 119

第 1 章 IBM Campaign のインストールの準備

インストールのプロセスには複数のソフトウェア要素とハードウェア要素が関係しており、IBM® が提供しないものも含まれています。IBM 文書には、IBM EMM 製品のインストール、構成、およびアップグレードに関する指示が記載されています。IBM が提供しているのではないシステムの操作については、それらの製品の資料を参照してください。

IBM EMM ソフトウェアのインストールを始める前に、インストールの計画を立ててください。この計画には、ビジネス目標や、その目標をサポートするために必要なハードウェア環境とソフトウェア環境が含まれます。

IBM Campaign インストールのチェックリスト

以下の手順は、Campaign の基本インストールの概要を示したものです。詳細は、本書の残りの部分で説明します。

A. インストールの準備

1. アップグレードする場合は、71 ページの『第 9 章 Campaign のアップグレード』を参照してください。
2. 3 ページの『Campaign を他のシステム・コンポーネントと共にインストールする』についてお読みください。
3. 4 ページの『前提条件』を満たしておきます。
4. 複数のパーティションを構成する場合は、51 ページの『第 7 章 Campaign での複数のパーティションの構成』を参照してください。
5. eMessage を使用する場合または使用することを計画している場合は、6 ページの『eMessage と Campaign の統合』を参照してください。

B. Campaign のデータ・ソースの準備

1. 9 ページの『ステップ: Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する』

データベース管理者と共に作業して、Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成します。

2. 10 ページの『ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する』

Campaign システム・テーブルおよび顧客 (ユーザー) テーブルへの ODBC 接続またはネイティブ接続を作成します。

3. 10 ページの『ステップ: JDBC ドライバーの Web アプリケーション・サーバーを構成する』

データベース・ドライバーを Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに追加します。

4. 11 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する』

必須の JNDI 名および推奨される JNDI 名を使用して、Campaign および Marketing Platform システム・テーブルへの JDBC 接続を作成します。

C. Campaign のインストール

1. 必要なデータベースおよび Web アプリケーション・サーバーの情報を収集します。

15 ページの『すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報』を参照してください。

2. 22 ページの『ステップ: IBM インストーラーを入手する』

Campaign インストーラーおよびレポート・パッケージ・インストーラーを入手します。

3. 23 ページの『手順: IBM EMM インストーラーを実行する』

Marketing Platform がインストールされて配置され、実行されている状態で、Campaign をインストールします。

D. 配置前の Campaign の構成

1. 27 ページの『ステップ: 手動で Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加する (必要な場合)』

システム・テーブルを Campaign インストーラーが自動的に作成するようにしなかった場合は、付属の SQL スクリプトを使用してシステム・テーブルを作成し、データを追加します。

2. 29 ページの『ステップ: Campaign を手動で登録する (必要な場合)』

インストーラーが Campaign を登録できない場合、Marketing Platform ユーティリティーを使用して手動で登録します。

3. 31 ページの『ステップ: Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)』

UNIX にインストールし、システム・テーブルがあるデータベース・タイプ以外のデータベース・タイプにアクセスできるようにする必要がある場合、起動スクリプトにデータベース環境変数およびライブラリー・パスを追加します。

E. Campaign Web アプリケーションの配置

1. 35 ページの『第 5 章 IBM Campaign Web アプリケーションの配置』の配置のガイドラインに従います。
2. 41 ページの『ステップ: Campaign サーバーを始動する』

サーバーを直接始動するか、または (Windows にインストールする場合) サーバーをサービスとしてオペレーティング・システムにインストールすることができます。

F. 配置後の Campaign の構成

1. 43 ページの『ステップ: Campaign リスナー稼働していることを確認する』

Campaign リスナーが稼働していることを確認します。どの Campaign 機能を実行する場合でも、その前にリスナーが稼働していなければなりません。

2. 43 ページの『ステップ: Campaign システム・ユーザーをセットアップする』

「設定」>「ユーザー」領域で、データ・ソース資格情報を保有する IBM システム・ユーザーをセットアップします。

3. 44 ページの『ステップ: 「構成」 ページでデータ・ソース・プロパティを追加する』

Campaign のインストール済み環境が使用するデータベースまたはスキーマごとに、該当するベンダーに適切なテンプレートをインポートします。次に、これらのテンプレートを使用して、データベースまたはスキーマごとにデータベース構成プロパティのセットを作成します。

4. 46 ページの『ステップ: 「構成」 ページで必須 Campaign プロパティを設定する』

「設定」>「構成」 ページで、データベース・プロパティおよびその他の必須プロパティを設定します。

5. 47 ページの『ステップ: Campaign のユーザー・テーブルをマップする』

顧客 (ユーザー) テーブルをマップします。

6. 47 ページの『ステップ: Campaign インストールを確認する』

キャンペーンとフローチャートを作成できることを確認します。

7. 48 ページの『ステップ: IBM アプリケーションを統合する場合のオプションの構成を行う』

Campaign を他の IBM アプリケーションと統合する場合は、統合を構成します。

Campaign を他のシステム・コンポーネントと共にインストールする

次の図は、IBM アプリケーションをインストールする場所の概要を示しています。この図にはすべての製品が示されており、これらがすべて Campaign にとって必須というわけではありません。

このセットアップは、基本インストールを表しています。セキュリティーおよびパフォーマンスの特定の要件を満たすには、より複雑な分散型のインストールが必要になる場合もあります。

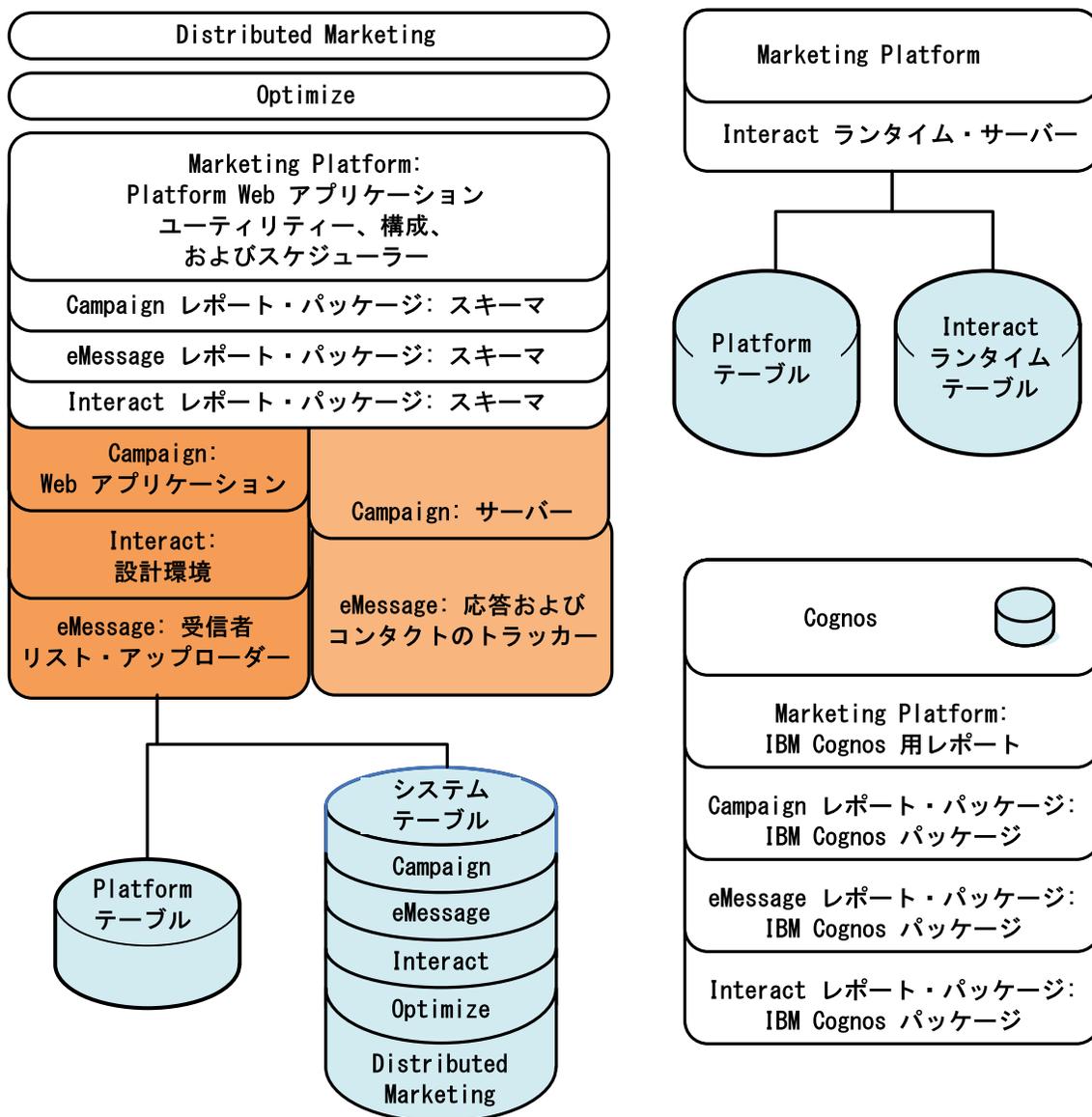


図 1. IBM EMM コンポーネント

前提条件

以下は、IBM EMM 製品のインストールのための前提条件です。

システム要件

システム要件について詳しくは、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」ガイドを参照してください。

JVM の要件

スイート内の IBM EMM アプリケーションは、専用の Java™ 仮想マシン (JVM) 上に配置する必要があります。IBM EMM 製品は、Web アプリケーション・サーバ

ーが使用する JVM をカスタマイズします。JVM 関連のエラーが発生する場合は、IBM EMM 製品専用の Oracle WebLogic または WebSphere® ドメインを作成しなければならないこともあります。

ネットワーク・ドメイン要件

クロスサイト・スクリプティングのセキュリティー・リスクを限定することを目的としたブラウザ制限に適合させるため、スイートとしてインストールされる IBM EMM 製品群は、同一ネットワーク・ドメインにインストールする必要があります。

知識要件

IBM EMM 製品をインストールするには、製品がインストールされる環境に関する十分な知識を持っているか、あるいはその知識を持っている人とともに作業を行う必要があります。これには、オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が含まれます。

クライアント・マシン

クライアント・マシンは、以下の構成要件を満たしている必要があります。

- ・ クライアント・マシンにポップアップの広告ウィンドウをブロックするソフトウェアがインストールされている場合には、Campaign が正しく機能しない可能性があります。最善の結果を得るため、Campaign の実行中にはポップアップの広告ウィンドウをブロックするソフトウェアを無効にしてください。

アクセス権限

ご使用のネットワーク権限で本書の手順を実行することができること、および適切な権限でログインしていることを確認してください。

適切な権限は次のとおりです。

- ・ Web アプリケーション・サーバーの管理パスワード。
- ・ 必要なすべてのデータベースに対する管理権限。
- ・ 編集する必要があるすべてのファイルに対する書き込み権限。
- ・ インストール・ディレクトリーやアップグレード時のバックアップ・ディレクトリーなどの、ファイルを保存する必要があるすべてのディレクトリーに対する書き込み権限。
- ・ インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限。
- ・ Web アプリケーション・サーバーと IBM EMM コンポーネントを実行するために使用するオペレーティング・システム・アカウントには、関連ディレクトリーとサブディレクトリーに対する読み取りと書き込みのアクセス権限がなければなりません。
- ・ UNIX の場合、Campaign と Marketing Platform をインストールするユーザー・アカウントは、Campaign ユーザーと同じグループのメンバーでなければなりません。このユーザー・アカウントには、有効なホーム・ディレクトリーがなければならず、そのディレクトリーに対する書き込み権限も必要です。
- ・ UNIX の場合、IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルには完全な実行権限 (rwxr-xr-x など) が必要です。

Marketing Platform の要件

IBM EMM 製品をインストールする前に、Marketing Platform がインストールされている必要があります。

連動する製品のグループごとに、Marketing Platform を一度だけインストールする必要があります。

重要: 各製品インストーラーは、必要な製品がインストールされているかどうかをチェックします。製品もしくはバージョンが Marketing Platform に登録されていない場合、インストールを続行する前にアップグレードもしくはインストールを行う必要があることが通知され、インストーラーが終了します。メッセージは、古いバージョンの製品が検出された場合、または製品が検出されなかった場合にのみ表示されます。

「設定」>「構成」ページでプロパティを設定するためには、その前に Marketing Platform を配置して実行しておく必要があります。

JAVA_HOME 環境変数の確認

IBM EMM 製品をインストールするマシンに JAVA_HOME 環境変数が定義されている場合には、Sun JRE のバージョン 1.6 を指していることを確認してください。

この環境変数は IBM EMM 製品のインストールに必須ではありませんが、存在する場合には Sun JRE 1.6 バージョンを指している必要があります。

JAVA_HOME 環境変数が存在し、間違った JRE を指し示している場合には、IBM EMM インストーラーを実行する前に JAVA_HOME 変数を設定解除する必要があります。そのためには、次のようにします。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、次のように入力します。

```
set JAVA_HOME=こちらは空のままにして、Enter キーを押します
```

- UNIX タイプ・システム: 端末で次のコマンドを入力します。

```
export JAVA_HOME=こちらは空のままにして、Enter キーを押します
```

環境変数を設定解除すると、IBM EMM インストーラーではインストーラーにバンドルされた JRE が使用されます。

インストールが完了した後に環境変数を再設定することができます。

eMessage と Campaign の統合

IBM Campaign を IBM eMessage と統合すると、eMessage を使用して、高度にパーソナライズした E メール・マーケティング・キャンペーンを行えます。

eMessage は IBM によってホストされるリソースにアクセスする機能を備えているので、顧客データマートに格納されている情報に基づいて、個別カスタマイズ・メッセージを設計、送信、およびモニターできます。

- Campaign で、フローチャートを使用して、E メール受信者のリストを作成し、各受信者のパーソナライズ・データを選択します。

- eMessage で、E メール設計、送信、および配信可能量に関して IBM によってホストされるリソースを使用して、E メール・マーケティング・キャンペーンを行います。

eMessage 構成について

Campaign をインストールすると、IBM eMessage が自動的にインストールされます。ただし、Campaign のインストール・プロセスにおいて、eMessage が構成されたり使用可能に設定されたりすることはありません。

Campaign をインストールした後に eMessage を使用するためには、ホストされた E メール・サブスクリプションを購入する必要があります。その上で、eMessage を構成して、IBM が IBM EMM Hosted Services の一部として保守する、ホストされた E メール・リソースへのセキュア接続を確立します。これらの E メール・リソースには、IBM がサブスクリプションの一環として作成する、ホストされた E メール・アカウントを使用してアクセスします。

eMessage をインストールおよび構成する方法を知るには、以下の資料を参照してください。

- 「*IBM Campaign* インストール・ガイド」では、eMessage をインストールまたはアップグレードする方法について説明しています。ローカル環境にインストールされた「オンプレミス」eMessage コンポーネントを準備する方法についても説明しています。
- 「*IBM eMessage* 起動および管理者ガイド」では、ホストされた「オンデマンド」E メール・リソースへの接続方法について説明しています。eMessage 実装を保守およびモニターする方法についても説明しています。

eMessage レポートの要件

IBM EMM は、レポート機能を提供するために IBM Cognos® を統合します。標準の eMessage パフォーマンス・レポートを表示するには、サポートされているバージョンの IBM Cognos と、IBM Campaign の関連レポート・パッケージをインストールする必要があります。標準の eMessage レポートは、Campaign レポート・パッケージの一部としてインストールされます。

詳しくは、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

第 2 章 IBM Campaign のデータ・ソースの準備

Campaign のデータ・ソースを準備するには、以下のステップで説明する手順を実行します。

1. 『ステップ: Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する』
2. 10 ページの『ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する』
3. 10 ページの『ステップ: JDBC ドライバーの Web アプリケーション・サーバーを構成する』
4. 11 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する』

複数のパーティションを構成する場合は、51 ページの『第 7 章 Campaign での複数のパーティションの構成』を読んでください。

ステップ: Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する

1. データベース管理者と共に作業して、Campaign システム・テーブルを格納するデータベースまたはスキーマを作成します。

注: Campaign は顧客テーブルを必要とします。これらのテーブルは、既に存在していなければなりません。

2. 後にインストール処理で必要になるシステム・ユーザー・アカウントを、データベース管理者に作成してもらいます。

注: システム・ユーザー・アカウントには、CREATE、DELETE、DROP、INSERT、SELECT、および UPDATE 権限が必要です。

3. 14 ページの『IBM Campaign データベース情報チェックリスト』を印刷します。データベースまたはスキーマの情報とデータベース・アカウントの情報を入手して、その情報をチェックリストに記録します。このセクションの残りのステップを実行していく中で、チェックリストへの記入を続けてください。こうすることで、その情報を後にインストール処理で使用できるようになります。

注: インストール時に Campaign スキーマに IBM eMessage システム・テーブルが作成されます。ただし、eMessage が使用可能に設定されるわけではありません。詳しくは、20 ページの『Campaign での eMessage のインストールについて』を参照してください。

ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する

Campaign サーバーがインストールされたマシンには、以下のデータベースへの ODBC 接続またはネイティブ接続が必要です。

- Campaign システム・テーブルを格納するデータベースまたはスキーマ
- 顧客テーブルを格納するデータベースまたはスキーマ

これらの ODBC 接続またはネイティブ接続を作成するには、以下のガイドラインに従ってください。

- UNIX 上のデータベースの場合: DB2[®] および Oracle データベースの場合はネイティブ接続を作成し、SQL サーバー、Teradata、Netezza[®] などの他のデータベースの場合は ODBC 接続を作成します。ネイティブ・データ・ソースを作成する手順は、データ・ソースのタイプおよび UNIX のバージョンによって異なります。特定の ODBC ドライバーのインストールおよび構成方法については、データ・ソースおよびオペレーティング・システムの文書を参照してください。
- Windows 上のデータベースの場合: 「コントロール パネル」の「管理ツール」> 「データ ソース (ODBC)」セクションで、新しい ODBC 接続を作成します。

14 ページの『IBM Campaign データベース情報チェックリスト』に ODBC 名を記録してください。

ステップ: JDBC ドライバーの Web アプリケーション・サーバーを構成する

Campaign を配置する予定の Web アプリケーション・サーバーには、JDBC 接続をサポートするための適切な JAR ファイルがなければなりません。Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、JAR ファイルの場所を追加する必要があります。

Campaign の接続先となるデータベース・タイプごとに以下の手順を実行して、Campaign システム・テーブルに Campaign Java コンポーネントがアクセスできるようにします。

1. 「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料を調べて、ご使用のデータベース・タイプに合う適切な JAR ファイルを判別します。本資料の発行時点で適切だったサポートされるデータベース・ドライバーのリストを以下に示します。
 - サポートされるバージョンの MS SQL Server の場合: sqljdbc4.jar
 - IBM DB2 9.7 の場合: db2jcc.jar
 - IBM DB2 10.1 の場合: db2jcc4.jar
 - サポートされるバージョンの Oracle の場合: ojdbc6.jar
2. IBM EMM がサポートしている、ベンダー提供の最新のタイプ 4 JDBC ドライバーを入手します。
 - Campaign を配置する予定のマシンにドライバーが存在しない場合は、そのマシン上の任意の場所にドライバーをコピーします。スペースを含まないパスにドライバーを解凍してください。

- データ・ソース・クライアントがインストールされているマシンからドライバーを入手する場合は、バージョンがサポートされていることを確認してください。
3. ドライバーの絶対パスとファイル名を、Campaign を配置する予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに含めます。
 - サポートされるすべてのバージョンの WebLogic で、環境変数が構成される `WebLogic_domain_directory/bin` ディレクトリーの `setDomainEnv` スクリプトにクラスパスを設定します。

ドライバーは `CLASSPATH` の値のリスト内ですべての既存値よりも前の最初のエントリーでなければなりません。以下に例を示します。

UNIX

```
CLASSPATH="/home/oracle/product/<version>/jdbc/lib/ojdbc6.jar:
${PRE_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WEBLOGIC_CLASSPATH}
${CLASSPATHSEP}${POST_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WLP_POST_CLASSPATH}"
export CLASSPATH
```

Windows

```
set CLASSPATH=c:\oracle\jdbc\lib\ojdbc6.jar;%PRE_CLASSPATH%;
%WEBLOGIC_CLASSPATH%;%POST_CLASSPATH%;%WLP_POST_CLASSPATH%
```

- サポートされているすべてのバージョンの WebSphere で、IBM EMM 製品ののための JDBC プロバイダーをセットアップする際に、管理コンソールでクラスパスを設定します。
4. Web アプリケーション・サーバーを再始動して、行った変更を有効にしてください。

起動の際に、コンソール・ログをモニターして、クラスパスにデータベース・ドライバーへのパスが含まれていることを確認します。

ステップ: Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する

Campaign Web アプリケーションは、JDBC 接続を使用して、必要なデータベースと通信可能でなければなりません。これらの JDBC 接続は、Campaign を配置する予定の Web アプリケーション・サーバーに作成します。

1. Campaign Web アプリケーションに作成する必要がある JDBC 接続を特定するには、以下のリストを使用してください。このリストには、推奨される JNDI 名および必須の JNDI 名が記載されています。
 - Campaign システム・テーブルを保持するデータベースへの接続。
 - パーティションが 1 つの場合、推奨される JNDI 名は `campaignPartition1DS` です。
 - 複数のパーティションがある場合のベスト・プラクティスは、最初の接続には `campaignPartition1DS` を使用し、2 番目の接続には `campaignPartition2DS` を使用するというような形にすることです。

注: このプラクティスは、一例としてのみ記載しています。Campaign システム・テーブル接続には、任意の JNDI 名を指定できます。

- Marketing Platform システム・テーブルを保持するデータベースへの接続。UnicaPlatformDS を JNDI 名として使用します。

重要: UnicaPlatformDS は、必須の JNDI 名です。

Campaign を、Marketing Platform と同じ JVM に配置している場合は、この接続が既にセットアップされているはずですが。

JDBC 接続を Web アプリケーション・サーバーに作成する方法については、WebLogic または WebSphere の資料を参照してください。

注: WebLogic を使用して、Oracle または DB2 データベースのデータ・ソースを構成する場合、「接続プール (Connection Pool)」タブの「プロパティ」セクションに、`user=<DBUser>` の形式でデータベース・ユーザー名を指定する必要があります。詳しくは、WebLogic の資料を参照してください。

2. すべての JNDI 名を 14 ページの『IBM Campaign データベース情報チェックリスト』に記録します。

JDBC 接続を作成するための情報

JDBC 接続を作成する際、このセクションを活用して、入力する必要がある値のいくつかを特定してください。

注: データベースのデフォルト・ポート設定を使用しない場合は、必ずそれを適切な値に変更するようにしてください。

この情報は、Web アプリケーション・サーバーが必要とする情報をすべて反映しているわけではありません。このセクションにおいて明示的に指示されていないものについては、デフォルト値を受け入れることができます。より包括的なヘルプが必要な場合は、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

WebLogic

アプリケーション・サーバーが WebLogic の場合は、以下の値を使用します。

SQLServer

- データベース・ドライバー: Microsoft MS SQL Server Driver (Type 4) Versions: 2008、2008R2
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス: `com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver`
- ドライバー URL: `jdbc:sqlserver://<your_db_host>:<your_db_port>;databaseName=<your_db_name>`
- プロパティ: `user=<your_db_user_name>` を追加

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: `oracle.jdbc.OracleDriver`

- ドライバー URL:
jdbc:oracle:thin:@<your_db_host>:<your_db_port>:<your_db_service_name>

上記に示された書式に従ってドライバー URL を入力します。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続に Oracle の RAC (Real Application Clusters) の書式を使用することは許可されません。

- プロパティ: user=<your_db_user_name> を追加

DB2

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: jdbc:db2://<your_db_host>:<your_db_port>/<your_db_name>
- プロパティ: user=<your_db_user_name> を追加

WebSphere

アプリケーション・サーバーが WebSphere の場合は、以下の値を使用します。

SQLServer

- ドライバー: 該当なし
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス:
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnectionPoolDataSource
- ドライバー URL: 該当なし

「データベース・タイプ」フィールドで、「ユーザー定義」を選択します。

JDBC プロバイダーとデータ・ソースを作成した後、データ・ソースのカスタム・プロパティにアクセスして、以下のようにプロパティを追加および変更します。

- serverName=<your_SQL_server_name>
- portNumber =<SQL_Server_Port_Number>
- databaseName=<your_database_name>
- enable2Phase = false

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: Oracle JDBC ドライバー
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: oracle.jdbc.OracleDriver
- ドライバー URL:
jdbc:oracle:thin:@<your_db_host>:<your_db_port>:<your_db_service_name>

上記に示された書式に従ってドライバー URL を入力します。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続に Oracle の RAC (Real Application Clusters) の書式を使用することは許可されません。

DB2

- ドライバー: DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: jdbc:db2://<your_db_host>:<your_db_port>/<your_db_name>

以下のカスタム・プロパティを追加します。

Name: webSphereDefaultIsolationLevel

Value: 2

Datatype: Integer

IBM Campaign データベース情報チェックリスト

後で使用するために、Campaign システム・テーブルを保持するデータベースに関する情報を記録してください。

フィールド	メモ
データベース・タイプ	
データベース名	
データベース・アカウントのユーザー名	
データベース・アカウントのパスワード	
JNDI 名	
ODBC 名	

UNIX 上にインストールする場合は、以下の追加情報を入手してください。これらの情報は、インストールおよび構成のプロセスで `setenv.sh` ファイルを編集する際に使用します。

データベース情報	メモ
データベース・タイプが次のいずれかのタイプである場合は、データベース・インストール・ディレクトリーを記録してください。 <ul style="list-style-type: none">• DB2• Oracle	
データベース・タイプが次のいずれかのタイプである場合は、ODBC.ini ファイルの場所を記録してください。 <ul style="list-style-type: none">• Netezza• Teradata	
どのデータベース・タイプであっても、Campaign が Solaris、Linux、または AIX® オペレーティング・システム上にインストールされる場合は、データベース・インストール済み環境における lib ディレクトリーの場所を記録してください。	

第 3 章 IBM Campaign のインストール

IBM Campaign をインストールするには、オペレーティング・システムに応じた正しいインストーラー・ファイルのセットを取得し、製品をインストールする予定のシステムがアクセスできる正しい場所にこれらのファイルを配置し、すべての前提条件が満たされていることを確認してから作業を続ける必要があります。

Campaign のインストールを続ける前に、インストール・ファイルまたは IBM Marketing Platform のインストール済みインスタンスが用意されている必要があることに留意してください。そのための作業をまだ行っていない場合、「*IBM Marketing Platform* インストール・ガイド」で詳細を確認してください。

すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報

このセクションに説明されているように、必要な情報を収集します。

Marketing Platform 情報

各 IBM EMM 製品のインストール・ウィザードは、製品を登録するために、Marketing Platform システム・テーブル・データベースと通信可能でなければなりません。

インストーラーを実行するたびに、Marketing Platform システム・テーブル・データベースのための以下のデータベース接続情報を入力する必要があります。

- データベース・タイプ。
- データベース・ホスト名。
- データベース・ポート。
- データベース名またはスキーマ ID。
- データベース・アカウントのユーザー名およびパスワード。

この情報は、データベースまたはスキーマを作成したときに取得したものです。

Web コンポーネント情報

Web アプリケーション・サーバーに配置した Web コンポーネントを持つすべての IBM EMM 製品で、以下の情報を取得する必要があります。

- Web アプリケーション・サーバーがインストールされるシステムの名前。セットアップする IBM EMM 環境に応じて、1 つまたは複数の名前となります。
- アプリケーション・サーバーが listen するポート。SSL を実装する予定の場合、SSL ポートを取得します。
- 配置システムのネットワーク・ドメイン。例えば、mycompany.com。

IBM サイト ID

インストーラーは、IBM サイト ID の入力を求めるプロンプトを出すことがあります。お客様の IBM サイト ID は、IBM ウェルカム・レター、技術サポート・ウェルカム・レター、ライセンス証書レター、またはソフトウェアの購入時に送られるその他の通知に記載されています。

IBM は、お客様の製品使用状況をさらに把握してカスタマー・サポートの改善を図るために、ソフトウェアによって提供されるデータを使用することがあります。収集されるデータには、個人を特定する情報は含まれていません。

こうした情報が収集されることを望まない場合には、Marketing Platform のインストール後に、管理権限を持つユーザーとして Marketing Platform にログオンします。「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「プラットフォーム」カテゴリ下の「ページのタグ付けを無効にする」プロパティを「True」に設定します。

IBM EMM インストーラーの機能

IBM EMM インストーラーの基本機能を十分に理解していない場合は、このセクションをお読みください。

インストーラー・ファイルの単一ディレクトリー要件

IBM EMM エンタープライズ製品をインストールするときには複数のインストーラーを組み合わせで使用します。

- マスター・インストーラー。ファイル名に IBM_EMM_Installer が含まれます。
- 製品固有のインストーラー。これらすべてでは、ファイル名の一部に製品名が含まれます。

IBM EMM 製品をインストールするには、マスター・インストーラーと製品インストーラーを同じディレクトリーに配置しなければなりません。マスター・インストーラーを実行すると、ディレクトリー内の製品インストール・ファイルが検出されます。その後、インストールする製品を選択できます。

マスター・インストーラーが含まれるディレクトリーに複数のバージョンの製品インストーラーが存在する場合、マスター・インストーラーによってインストール・ウィザードの IBM EMM 製品画面に表示されるのは、必ず製品の最新バージョンとなります。

パッチのインストール

IBM EMM 製品の新規インストールの実行直後に、パッチのインストールを計画することもできます。その場合、パッチ・インストーラーは、基本バージョンとマスター・インストーラーが入っているディレクトリーに配置してください。インストーラーを実行すると、基本バージョンとパッチの両方を選択できます。その後、インストーラーによって両方が適切な順序でインストールされます。

製品インストール・ディレクトリーの選択

ネットワークでアクセス可能なシステム上の任意のディレクトリーにインストールできます。インストール・ディレクトリーは、パスを入力するか、参照して選択するかのどちらかの方法で指定できます。

パスの前にピリオドを入力すると、インストーラーを実行している場所から対象ディレクトリーへの相対パスを指定できます。

指定したディレクトリーが存在しない場合、インストーラーは、適切な権限でログインされたことを想定してディレクトリーを作成します。

IBM EMM インストールの最上位ディレクトリーは、/IBM/EMM (UNIX) または C:\¥IBM¥EMM (Windows) です。次いで、製品インストーラーによって製品ファイルが EMM ディレクトリーの下各サブディレクトリーにインストールされます。

インストール・タイプ

IBM EMM インストーラーによって、以下のタイプのインストールが実行されます。

- **新規インストール:** インストーラーを実行して、IBM EMM 製品がこれまでにインストールされたことがないディレクトリーを選択する場合、インストーラーは自動的に新規インストールを実行します。
- **アップグレード・インストール:** インストーラーを実行し、旧バージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択すると、インストーラーは自動的にアップグレード・インストールを実行します。インストーラーによってデータベースが自動的に更新される製品の場合、アップグレード・インストールで新規テーブルが追加されますが、既存のテーブル内のデータは上書きされません。

インストーラーによってデータベースが自動的に更新される製品の場合、データベースにテーブルが存在するとインストーラーはテーブルを作成しないので、アップグレード中にエラーが発生する可能性があります。こうしたエラーは無視しても構いません。詳しくは、アップグレードに関する章を参照してください。

- **再インストール:** インストーラーの実行時に、同じバージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは既存のインストールを上書きします。既存の任意のデータを保持するには、再インストールする前に、インストール・ディレクトリーとシステム・テーブル・データベースをバックアップしておきます。

通常、再インストールは推奨されません。

インストール・モード

IBM EMM インストーラーは、以下のモードで実行できます。

- コンソール (コマンド・ライン) モード

コンソール・モードでは、オプションは番号付きリストで表示されます。希望するオプションを選択するには、その番号を指定します。番号を入力しないで Enter を押すと、インストーラーはデフォルト・オプションを使用します。デフォルト・オプションは、以下のいずれかの記号によって表されます。

--> この記号が表示されている場合にオプションを選択するには、対象のオプションの番号を入力してから Enter を押します。

[X] この記号は、リストにあるオプションを 1 つでも、複数でも、全部でも選択できることを示しています。隣に [X] 記号が表示されているオプションの番号を入力して Enter を押すと、そのオプションがクリア、つまり選択解除されます。現在選択されていない (隣の記号が [] の) オプションの番号を入力して Enter を押すと、そのオプションが選択されます。

複数のオプションを選択解除または選択するには、番号をコンマ区切りリストの形式で入力します。

- Windows GUI モードまたは UNIX X Window モード
- ユーザーとの対話が不要な、無人つまりサイレント・モード

不在モードを使用すると、IBM EMM 製品を何度もインストールできます。詳しくは、『無人モードを使用して複数回インストールする』を参照してください。

無人モードを使用して複数回インストールする

IBM EMM 製品を複数回インストールする必要がある場合は、ユーザー入力が不要な無人モードで IBM EMM インストーラーを実行できます。

応答ファイルについて

不在モード (サイレント・モードとも呼ばれる) では、コンソール・モードまたは GUI モードの使用時にインストール・プロンプトでユーザーが入力するような情報を提供するための 1 つのファイル、または一連のファイルが必要になります。これらのファイルは応答ファイルと呼ばれます。

以下のどちらのオプションを使用しても、応答ファイルを作成できます。

- サンプル応答ファイルをテンプレートとして使用して、応答を直接作成することができます。サンプル・ファイルは圧縮アーカイブ ResponseFiles の製品インストーラーにあります。サンプル応答ファイルの名前は、次のとおりです。
 - IBM EMM マスター・インストーラー - `installer.properties`
 - 製品インストーラー - `installer_` の後に、製品名のイニシャルとバージョン番号が続きます。例えば、Campaign インストーラーには `installer_ucN.N.N.N.properties` という応答ファイルがあります。
 - 製品レポート・パック・インストーラー - `installer_` に、レポート・パッケのイニシャルと、製品名のイニシャル、およびバージョン番号が続きます。例えば、Campaign レポート・パック・インストーラーには `installer_urpcN.N.N.N.properties` という応答ファイルがあります。

必要に応じてサンプル・ファイルを編集し、インストーラーと同じディレクトリに置いてください。

- また、不在モードでの実行をセットアップする前に、Windows GUI または UNIX X-windows モード、またはコンソール・モードでインストーラーを実行して、応答ファイルを作成する方法も選択できます。

IBM EMM マスター・インストーラーは 1 つのファイルを作成し、インストールする各 IBM EMM 製品も 1 つまたは複数のファイルを作成します。

インストーラーを実行したときに作成される応答ファイルは `.properties` という拡張子 (`installer_productversion.properties` など) と、IBM EMM インストーラー自体のファイルから成るので、名前は `installer.properties` となります。インストーラーは、指定されたディレクトリーにこれらのファイルを作成します。

重要: セキュリティー上の理由により、インストーラーはデータベース・パスワードを応答ファイルに記録しません。不在モードで応答ファイルを作成する際は、データベース・パスワードを入力するために各々の応答ファイルを編集する必要があります。各々の応答ファイルを開き、これらの編集を行う部分を見つけるために `PASSWORD` を探してください。

インストーラーが応答ファイルを検索する場所

インストーラーは、不在モードで実行されると、以下のように応答ファイルを探します。

- 最初に、インストーラーはインストール・ディレクトリーを検索します。
- 次に、インストーラーは、インストールを実行しているユーザーのホーム・ディレクトリー内を探します。

すべての応答ファイルは同じディレクトリーにある必要があります。応答ファイルの読み取りが行われる場所のパスは、コマンド・ラインに引数を追加することで変更できます。以下に例を示します。

```
-DUNICA_REPLAY_READ_DIR="myDirPath" -f myDirPath/installer.properties
```

アンインストールする際の無人モードによる影響

不在モードを使用してインストールされた製品をアンインストールする際は、不在モードで (ユーザーとの対話用のダイアログは表示されない) アンインストールが実行されます。

無人モードとアップグレード

アップグレードの際、以前に応答ファイルを作成しており、不在モードで実行する場合は、インストーラーは以前に設定されたインストール・ディレクトリーを使用します。応答ファイルがないときに不在モードを使用してアップグレードする場合は、初回のインストール時にインストーラーを手動で実行して応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで現行のインストール・ディレクトリーを必ず選択してください。

IBM Campaign コンポーネントの選択

Campaign サーバーと Web アプリケーションは、同じマシンにインストールすることも、それぞれ異なるマシンにインストールすることもできます。

以下の表は、Campaign のインストール時に選択可能なコンポーネントを示しています。

コンポーネント	説明
Campaign サーバー	Campaign フローチャートの設計および実行をサポートする Campaign 起動スクリプトおよびコンポーネント。プライマリー・コンポーネントは、常に実行されていなければならないリスナー (unica_aclsnr.exe) とサーバー (unica_acsvr.exe) です。リスナーは、ログインごとおよびアクティブ・フローチャートごとに、別個の unica_acsvr.exe プロセスを spawn します。例えば、あるユーザーがログインしてフローチャートを開くと、リスナーは unica_acsvr.exe のインスタンスを 2 つ spawn します。
J2EE アプリケーション	Campaign ユーザー・インターフェースを提供する Web アプリケーション。
開発者ツールキット	カスタム検証を実装するために使用する検証クラス。
Campaign システム・テーブル DDL ファイル	Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加する SQL スクリプト。
アップグレード・ツール	アップグレードを完了するためのツール。

IBM Campaign Reports Package のインストール

Campaign Reports Package のインストールについては、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

Campaign での eMessage のインストールについて

IBM Campaign をインストールすると、IBM eMessage をサポートするために必要なファイルが、インストーラーによって以下のように自動的に含まれます。

- eMessage が Campaign ディレクトリー構造内にサブディレクトリーとして作成されます。
- eMessage 構成プロパティーが IBM Marketing Platform でリストされますが、それらの構成プロパティーはアクティブではありません。
- eMessage 固有のデータベース表が Campaign スキーマに作成されますが、それらの表に入っているのは初期データのみです。
- メニューなど eMessage に固有の機能は、eMessage を使用可能にして構成するまで表示されません。

インストールされる eMessage コンポーネントについては、21 ページの『eMessage コンポーネントがインストールされる場所』を参照してください。

パーソナライズされたマーケティング E メールを送信するためには、その前に、ホストされた E メール・アカウントを IBM に要求する必要があります。

E メール・アカウントを要求すると、IBM はコンサルテーション・プロセスを開始します。このプロセスは、お客様に eMessage に慣れ親しんでいただくこと、ホストされた E メール・リソースにお客様を接続すること、および主要インターネット・サービス・プロバイダー (ISP) の間で正当な E メール・マーケティング担当者

としての評判を確立することを目的としています。顧客や見込み顧客へのマーケティング・メッセージの配信が成功するためには、好ましい評判を確立することが非常に重要です。

eMessage を使用可能にして構成する方法、およびホストされた E メール・アカウントを準備する方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

eMessage コンポーネントがインストールされる場所

eMessage には、受信者リスト・アップローダー (RLU) と、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) と呼ばれる特殊なコンポーネントが必要です。

受信者リスト・アップローダー (RLU) は、Campaign と連動して、E メール受信者のリストに関連付けられたアドレス、パーソナライズ・データ、およびメタデータを IBM EMM Hosted Services にアップロードする、eMessage プラグイン・コンポーネントです。

eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) は、IBM EMM Hosted Services からリンク・トラッキングおよび E メール配信通知データを取得し、Campaign スキーマ内にある eMessage システム・テーブルに保管します。

これらのコンポーネントは、IBM eMessage を使用可能にして構成した場合のみ、作動します。eMessage を使用可能にして RLU および RCT と連動する方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルトでのコンポーネントのインストール場所

IBM インストーラーは、Campaign J2EE アプリケーションがインストールされたマシン上に RLU を置きます。RLU の場所は、構成プロパティー Campaign > partitions > partition1 > eMessage > eMessagePluginJarFile に記録されます。

インストーラーは、Campaign サーバーがインストールされたマシン上に RCT を置きます。

J2EE コンポーネントとサーバー・コンポーネントが別々のマシンにある場合は、各マシンでインストーラーを実行して、J2EE アプリケーションに対しては RLU を、Campaign サーバーに対しては RCT をそれぞれインストールしてください。

複数のパーティションでの eMessage コンポーネント

eMessage インストール済み環境全体で、1 つの RLU のみが使用されます。インストーラーは、partition1 (デフォルトのパーティション) の eMessagePluginJarFile 構成プロパティーのみを取り込みます。eMessage インストール済み環境で複数のパーティションを使用している場合は、他のすべてのパーティションの RLU の場所を手動で構成する必要があります。eMessagePluginJarFile プロパティーに指定する場所は、すべてのパーティションで同じです。詳しくは、67 ページの『ステップ: パーティションの RLU の場所を指定する』を参照してください。

RCT は eMessage インストール済み環境全体で 1 つしかありませんが、eMessage はその場所を構成プロパティに指定する必要はありません。RCT で受信されるレスポンスが、適切なレスポンス属性に対して該当するローカル・パーティションを自動的に指定します。

ステップ: IBM インストーラーを入手する

DVD を入手するか、または IBM からソフトウェアをダウンロードします。

インストール・ファイルのダウンロード場所については、必要に応じて、購入時に提供された資料を参照するか、IBM の営業担当者にお問い合わせください。

重要: 以下のインストール・ファイルのすべてを同じディレクトリーに配置します。これは、インストール要件です。

- IBM インストーラー。
- Campaign インストーラー。

IBM レポート作成機能を使用することを計画している場合は、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

UNIX タイプのシステムでの権限の設定

UNIX タイプのオペレーティング・システムでは、インストール・ファイルに完全な実行権限 (rwxr-xr-x) があることを確認してください。

正しいインストーラー・ファイルの選択

インストール・ファイルの名前は、製品のバージョンと、使用が想定されているオペレーティング・システムとに基づいて設定されます。ただし、コンソール・モードで実行される UNIX ファイルは、オペレーティング・システム固有ではないため、このファイルは例外です。UNIX では、インストール・モードが X Window またはコンソールのどちらであるかに応じて異なるファイルが使用されます。

ここに、インストール環境に基づいて選択できるインストーラーの例をいくつか示します。

Windows - GUI およびコンソール・モード - *Product_N.N.N.N_win64.exe* は、バージョンが N.N.N.N で、Windows 64 ビットのオペレーティング・システムにインストールするためのものです。

UNIX - X-windows モード - *Product_N.N.N.N_solaris64.bin* は、バージョンが N.N.N.N で、Solaris 64 ビットのオペレーティング・システムにインストールするためのものです。

UNIX - コンソール・モード - *Product_N.N.N.N.sh* は、バージョンが N.N.N.N で、すべての UNIX オペレーティング・システムにインストールするためのものです。

手順: IBM EMM インストーラーを実行する

IBM EMM インストーラーを実行する前に、以下の前提条件を満たしていることを確認してください。

- IBM EMM インストーラーと、インストール予定の製品のインストーラーをダウンロード済みであること。IBM EMM インストーラーと製品インストーラーは両方とも、同じディレクトリーに存在していなければなりません。
- 15 ページの『すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報』に説明されているように、収集した情報が使用可能になっている。

他の IBM EMM 製品がインストールされているシステムでインストーラーを再実行する場合、これら他製品を再インストールしないでください。

インストーラーについての詳細、またはウィザードでの入力に関してヘルプ情報が必要な場合には、このセクションの他のトピックを参照してください。

以下に示すように IBM EMM インストーラーを実行し、ウィザードの指示に従ってください。

- GUI または X Window System モード

IBM_EMM_Installer ファイルを実行します。UNIX の場合は、.bin ファイルを使用します。

- コンソール・モード

コマンド・プロンプトを開き、IBM ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリーから、以下のように IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルを実行します。

Windows の場合、IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルに `-i console` を指定して実行します。例: `IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i console`

UNIX の場合、IBM_EMM_Installer.sh ファイルにスイッチを指定しないで実行します。

注: Solaris では、Bash シェルからインストーラーを実行する必要があります。例: `# bash ./IBM_EMM_Installer_9.0.0.0.sh`

- 無人モード

コマンド・プロンプトを開き、IBM EMM ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリーから、`-i silent` を付けて IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルを実行します。UNIX の場合は、.bin ファイルを使用します。例えば、インストーラーと同じディレクトリーに置かれた応答ファイルを指定するには、次のようにします。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent
```

別のディレクトリーにある応答ファイルを指定するには、`-f filepath/filename` を使用します。絶対パスを使用してください。以下に例を示します。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent -f filepath/filename
```

不在モードについて詳しくは、18 ページの『無人モードを使用して複数回インストールする』を参照してください。

インストール・ウィザード内の移動

インストーラーが GUI モードで実行されているときは、「進む」、「戻る」、「キャンセル」、および「完了」ボタンを使用して移動します。

インストーラーがコンソール・モードで実行されているときは、ウィザードの各画面のヘルプ・テキストで説明されているように、GUI モードでのボタンに対応する番号を入力して移動します。コンソール・モードでは、追加の再表示コマンドも使用可能です。

コンソール・モードでは、プロンプト行の末尾に 1 つの数字または文字が大括弧で囲まれて表示されます。これは、何も入力しないで **Enter** キーを押した場合に出されるデフォルトのコマンドです。 **back** と入力して直前の画面に戻ることや、**quit** と入力してインストールをキャンセルすることもできます。

データベース環境変数

インストール時に、インストーラーは、使用するデータベースのタイプについてのプロンプトを出すことがあります。これは、使用するデータベースのインストールに固有の環境変数の一部を、Web アプリケーションの **setenv** ファイルにインストーラーが自動的に設定できるようにするためです。サポートされているデータベースの場合、インストーラーは自動的に値を構成できるため、インストールの完了後にそれらを手動で設定することが不要になります。

「データベース・タイプ」画面が表示されたら、使用するデータベースのタイプを選択します。

UNIX インストール済み環境の場合にのみ、以下に示されているように情報を入力します。インストーラー画面にリストされないデータベース・タイプについては、インストールの完了後に、31 ページの『ステップ: Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)』に説明されているように **setenv** ファイルを手動で構成することができます。

データベース環境変数

データベース	入力する値
IBM DB2	<ul style="list-style-type: none">DB2 インストール・ディレクトリー 例えば、<code>/usr/lpp/db2_06_01</code> または <code>C:%Program Files%IBM%SQLLIB</code> とします。これは、<code>DB2DIR</code> 環境変数として別の場所に設定することがある値です。DB2 インスタンス・パス 例えば、<code>/home/db2inst1</code> または <code>C:%db2inst1</code> とします。
Microsoft SQL Server	追加の設定は不要です。

データベース	入力する値
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle インストール・ディレクトリー 例えば、/opt/oracle または C:\oracle とします。これは、ORACLE_BASE 環境変数として別の場所に設定することがある値です。 • Oracle のホーム・ディレクトリー 例えば、/home/oracle/product/11.1.0/db_1 または C:\oracle\ora11.1 とします。これは、ORACLE_HOME 環境変数として別の場所に設定することがある値です。

インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成する方法

IBM EMM 製品のインストール後に EAR ファイルを作成する場合は、以下の手順に従ってください。この作業は、製品の異なる組み合わせを EAR ファイルに含める場合に行うことがあります。

複数の WAR ファイルは、単一のディレクトリーに入っていなければなりません。コマンド・ラインからコンソール・モードでインストーラーを実行します。

1. コンソール・モードでインストーラーを初めて実行する場合は、インストールされる製品ごとにインストーラーの .properties ファイルのバックアップ・コピーを作成します。

IBM 製品インストーラーはそれぞれ、.properties 拡張子が付いた 1 つ以上の応答ファイルを作成します。これらのファイルはインストーラーが置かれている同一のディレクトリーに存在します。installer_productversion.properties ファイルおよび IBM インストーラー自体のためのファイルである installer.properties など、.properties 拡張子が付いたすべてのファイルを実際にバックアップしてください。

不在モードでインストーラーを実行する場合は、元の .properties ファイルをバックアップする必要があります。なぜなら、不在モードでインストーラーを実行すると、それらのファイルが消去されてしまうためです。EAR ファイルを作成するには、初回インストール時にインストーラーが .properties ファイルに書き込む情報が必要です。

2. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーを、インストーラーが入っているディレクトリーに変更します。
3. インストーラーの実行可能ファイルに次のオプションを指定して実行します。

```
-DUNICA_GOTO_CREATEEARFILE=TRUE
```

UNIX タイプのシステムでは、.sh ファイルではなく、.bin ファイルを実行します。

インストーラー・ウィザードが実行されます。

4. ウィザードの指示に従ってください。
5. 追加の EAR ファイルを作成する前に、.properties ファイルを、初めてコンソール・モードで実行する前に作成したバックアップ・コピーで上書きします。

第 4 章 配置前の IBM Campaign の構成

このセクションでは、この Web アプリケーションを配置する前に行う構成タスクについて説明します。

ステップ: 手動で Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加する (必要な場合)

デフォルトでは、Campaign インストーラーが自動的に、操作に必要なシステム・テーブルを自動的に作成してデータを追加します。ただし、データベース・ポリシーによってインストーラーがこのステップを自動的に実行できない場合、あるいは何らかの理由でインストール時にこのステップを手動で行うことを選択した場合には、ここで説明する手順を完了してからでないと、Campaign を使用できません。

注: eMessage を使用可能にすることを計画している場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加することも必要です (インストーラーによって自動的に行われなかった場合)。詳しくは、28 ページの『手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)』を参照してください。

インストール時に「Campaign コンポーネント (Campaign Components)」ページで「**Campaign システム表 DDL ファイル**」オプションを選択した場合、IBM インストーラーは、Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加するために使用できる一連の SQL スクリプトをインストールします。これらの SQL スクリプトは、Campaign サーバーのインストール済み環境の下の `ddl` ディレクトリーにインストールされます。システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、Campaign インストール済み環境の下の `ddl/unicode` ディレクトリーに、該当するスクリプトがあります。

SQL スクリプトを使用するには、データベース・クライアントを実行して、Campaign システム・テーブルを格納するデータベースまたはスキーマにスクリプトを適用します。SQL スクリプトの実行方法については、ご使用のデータベース・ソフトウェアの資料を参照してください。

以下の表に、手動で Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加するために提供されている SQL スクリプトをリストします。

表 1. Campaign システム・テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ac_systab_db2.sql
Microsoft SQL Server	ac_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ac_systab_ora.sql

表 2. Campaign システム・テーブルにデータを追加するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ac_populate_tables_db2.sql
Microsoft SQL Server	ac_populate_tables_sqlsvr.sql
Oracle	ac_populate_tables_ora.sql

手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)

eMessage を使用するためには、Campaign スキーマに追加のシステム・テーブルを作成し、これらのテーブルに初期データを設定する必要があります。これらのテーブルを使用するのは、eMessage のみです。

システム・テーブルを自動的に作成するオプションを選択すると、Campaign インストーラーは、Campaign スキーマで eMessage システム・テーブルを自動的に作成し、データを追加します。ただし、このオプションを選択しない場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加する必要があります。

データベース・クライアントを使用して、Campaign データベースに対して適切なスクリプトを実行します。ご使用のインストール済み環境に適切なスクリプトを判別するには、以下の表を参照してください。実行する必要のあるスクリプトは、Campaign スキーマをホストするデータベースのタイプ、および Campaign テーブルが Unicode 用に構成されているかどうかによって異なります。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

eMessage テーブルを作成するスクリプト

IBM では、ローカル環境に eMessage テーブルを作成する ace_op_systab スクリプトを提供しています。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、eMessage インストール済み環境の dd1/unicode ディレクトリーにある適切なスクリプトを見つけます。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されていない場合は、eMessage インストール済み環境の dd1 ディレクトリーにある非 Unicode 用のスクリプトを使用します。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_systab_db2.sql
	システム・テーブルが置かれるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 32K 以上のページ・サイズが必要です。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
Microsoft SQL Server	ace_op_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_systab_ora.sql

eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

IBM では、ローカル環境で eMessage テーブルにデータを追加する ace_op_populate_systab スクリプトを提供しています。

スクリプトの場所

eMessage インストール済み環境の dd1 ディレクトリーにあるデータ追加用のスクリプトを見つけます。IBM で用意しているデータ追加用スクリプトのバージョンは 1 つだけです。これらのスクリプトは、Unicode テーブルまたは非 Unicode テーブルのいずれにも使用できます。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_populate_systab_db2.sql
Microsoft SQL Server	ace_op_populate_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_populate_systab_ora.sql

ステップ: Campaign を手動で登録する (必要な場合)

インストール処理の際に Campaign インストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できなかった場合、その失敗を通知するエラー・メッセージが表示されます。インストール処理は続行しますが、その場合には、Campaign 情報を Marketing Platform システム・テーブルに手動でインポートする必要があります。

この手順で言及されるユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。ユーティリティーの使用について詳しくは、以下を参照してください。

- 91 ページの『configTool ユーティリティー』
 - 100 ページの『populateDb ユーティリティー』
1. 以下のコマンド例をガイドラインとして、populateDb ユーティリティーを実行します。これにより、セキュリティの役割と権限がデフォルト・パーティションにインポートされます。

```
populateDb.bat -n Campaign
```

2. 以下のコマンドをガイドラインとして、configTool ユーティリティーを実行します。これにより、構成プロパティおよびメニュー項目がインポートされます。ユーティリティーは、ファイルの数だけ実行します。

```
configTool -r Campaign -f
"full_path_to_Campaign_installation_directory%conf%
campaign_configuration.xml"
```

```
configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu" -f
"full_path_to_Campaign_installation_directory%conf%
campaign_navigation.xml"
```

```
configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|settingsMenu" -f
"full_path_to_Campaign_installation_directory%conf%
campaign_setup_navigation.xml"
```

```
configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu|Analytics" -f
"full_path_to_Campaign_installation_directory%conf%
campaign_analysis_navigation.xml"
```

```
configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|alerts" -f
"full_path_to_Campaign_installation_directory%conf%campaign_alerts.xml"
```

手動による eMessage の登録 (必要な場合)

デフォルトでは、Campaign インストーラーが自動的に eMessage を IBM Marketing Platform に登録しますが、使用可能にはしません。場合によっては、Campaign インストーラーが自動的に eMessage を登録する際に Marketing Platform システム・テーブルに接続しない場合があります。

インストーラーが eMessage を自動的に登録しない場合は、IBM EMM インストールに付属の configTool ユーティリティーを使用して、手動で eMessage を登録する必要があります。configTool は、Marketing Platform インストール済み環境の tools%bin ディレクトリーにあります。

手動で eMessage を登録するには、以下のように configTool ユーティリティーを実行します。

```
configTool -r eMessage -f
"full_path_to_eMessage_installation_directory%conf%emessage_
configuration.xml"
```

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign インストール・ディレクトリーのサブディレクトリーです。

eMessage の登録および構成について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

ステップ: Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)

Campaign のインストール中に、IBM インストーラーはデータベース情報を収集し、その情報を使用して、Campaign システム・テーブルの作成と使用に必要なデータベースおよび環境変数を自動的に構成します。それらの設定は、Campaign サーバー・インストール済み環境下の bin ディレクトリー内にある `setenv.sh` ファイルに格納されます。

システム・テーブルと同じタイプのデータベースを使用しないデータ・ソース (Campaign 顧客テーブルなど) に対するアクセスについては、『データベース環境変数およびライブラリー環境変数 (UNIX)』に示されているデータベース環境変数とライブラリー環境変数を追加するために `setenv.sh` ファイルを手動で構成する必要があります。

なお、Campaign サーバーが既に実行中のときにこのファイルを変更する場合は、同サーバーを再始動した後でないと `setenv` ファイルの変更が認識されない点に注意してください。詳しくは、41 ページの『ステップ: Campaign サーバーを始動する』を参照してください。

`setenv` ファイルに追加する必要がある情報については、14 ページの『IBM Campaign データベース情報チェックリスト』を参照してください。

データベース環境変数およびライブラリー環境変数 (UNIX)

以下の表に示すように、データベース (顧客テーブルと、インストール時に「手動データベース・セットアップ」を選択した場合はシステム・テーブル) およびオペレーティング・システムに必要なデータベース環境変数とライブラリー環境変数を、`setenv.sh` ファイルにセットアップします。

データベース環境変数

データベース	構文および説明
DB2	<pre>DB2DIR=<i>full_dir_path</i> export DB2DIR DB2 インストール・ディレクトリー (例: /usr/lpp/db2_06_01)。 . <i>full_path_to_db2profile</i> DB2 ユーザーにデータベース構成を提供 (例: /home/db2inst1/sqllib/db2profile)。</pre> <p>「.」(ピリオドの後にスペース) に注意。</p>

データベース	構文および説明
Netezza	<pre>NZ_ODBC_INI_PATH=<i>full_dir_path</i> export NZ_ODBC_INI_PATH</pre> <p>odbc.ini ファイルのディレクトリーの場所 (例えば、/opt/odbc64v51)</p> <pre>ODBCINI=<i>full_path_and_file_name</i> export ODBCINI</pre> <p>odbc.ini ファイルへの絶対パス</p>
Oracle	<pre>ORACLE_BASE=<i>full_dir_path</i> export ORACLE_BASE</pre> <p>Oracle インストール・ディレクトリー</p> <pre>ORACLE_HOME=<i>full_dir_path</i> export ORACLE_HOME</pre> <p>Oracle のホーム・ディレクトリー (例えば、/home/oracle/OraHome1)</p>
Teradata	<pre>ODBCINI=<i>full_path_and_file_name</i> export ODBCINI</pre> <p>odbc.ini ファイルへの絶対パス</p>

ライブラリー環境変数

使用する UNIX オペレーティング・システムに応じて、以下のようにライブラリー環境変数を定義します。

オペレーティング・システム	値
SunOS および Linux	<pre>LD_LIBRARY_PATH</pre> <p>以下に例を示します。</p> <pre>LD_LIBRARY_PATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:\$LD_LIBRARY_PATH</pre> <pre>export LD_LIBRARY_PATH</pre> <p>注: LD_LIBRARY_PATH_64 (64 ビット・リンク用) が設定されている場合、削除してください。 LD_LIBRARY_PATH_64 の設定時は、LD_LIBRARY_PATH 変数が無視されます。</p>
AIX	<pre>LIBPATH</pre> <p>例: LIBPATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:/usr/lib:\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib</p>

オペレーティング・システム	値
HP-UX	SHLIB_PATH 例: SHLIB_PATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:/usr/lib:\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib

Oracle データベースのライブラリー・ディレクトリー

Oracle のバージョンに応じて、lib ディレクトリーの命名規則が異なります。比較的古いバージョンの場合、32 ビットでは lib、64 ビットでは lib64 を使用します。比較的新しいバージョンの場合、32 ビットでは lib32、64 ビットでは lib を使用します。

32 ビットの Campaign をインストールする場合、\$ORACLE_HOME/lib32 または \$ORACLE_HOME/lib のいずれか一方、つまり 32 ビットの Oracle ライブラリーが入っているものを含めてください。

64 ビットの Campaign をインストールする場合、\$ORACLE_HOME/lib または \$ORACLE_HOME/lib64 のいずれか一方、つまり 64 ビットの Oracle ライブラリーが入っているものを含めてください。

注: 32 ビットと 64 ビットの両方のライブラリーへのパスを含めないでください。ご使用の Campaign のバージョンに合わせて使用するライブラリーへのパスのみを含めてください。

第 5 章 IBM Campaign Web アプリケーションの配置

Campaign を配置するには、このセクションのガイドラインに従ってから、Campaign サーバーを始動してください。

IBM インストーラーを実行したときに、Campaign を EAR ファイルに含めたか、または Campaign WAR ファイルを配置するように選択した可能性があります。Marketing Platform または他の製品を EAR ファイルに含めた場合、EAR ファイルに含めた製品の個々のインストール・ガイドに詳しく示されている、配置ガイドラインのすべてに従う必要があります。

ここでは、Web アプリケーション・サーバーでの作業の方法は理解していると想定します。管理コンソール内の移動などに関する詳細は、Web アプリケーション・サーバーの文書を参照してください。

ステップ: Web アプリケーションのセッション・タイムアウトを設定する (オプション)

セッション・タイムアウトによって、非アクティブの HTTP セッションが、期限切れになるまで開いた状態を維持できる期間が決まります。

Web アプリケーション・サーバーにセッション・タイムアウトを設定するには、次のようにします。

- **WebSphere:** IBM WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、セッション・タイムアウトを分単位で設定します。この設定は、サーバーおよびエンタープライズ・アプリケーション・レベルで調整できます。詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。
- **WebLogic:** WebLogic コンソールを使用して、セッション・タイムアウトを秒単位で設定するか、weblogic.xml ファイル内で **session-descriptor** 要素の **TimeoutSecs** パラメーター値を調整します。

WebSphere Application Server への IBM Campaign の配置

WAR ファイルまたは EAR ファイルから、WebSphere Application Server のサポート対象バージョンに IBM Campaign を配置できます。

始める前に

IBM Campaign を 1 つの WAR ファイルから配置するか、EAR ファイルの中のモジュールとして配置するかに応じて、それぞれ該当する手順に従ってください。WebSphere Application Server についての追加情報が必要な場合は、以下のリンクを参照してください。

- WebSphere Application Server バージョン 8 の場合、Welcome to the WebSphere Application Server information center を参照してください。
- WebSphere Application Server バージョン 7 の場合、WebSphere Application Server Version 7.0 インフォメーション・センターを参照してください。

WAR ファイルから WebSphere Application Server 上に IBM Campaign を配置するには

WAR ファイル (EAR ファイルではなく) から WebSphere Application Server へ IBM Campaign アプリケーションを配置するには、以下の手順を実行します。

IBM Campaign を配置する前に、以下のようになります。

- ご使用の WebSphere のバージョンが、必要なフィックスパックまたはアップグレードも含めて、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料に記載された要件を満たしていることを確認します。
- WebSphere でデータ・ソースとデータベース・プロバイダーを作成したことを確認します。

9 ページの『第 2 章 IBM Campaign のデータ・ソースの準備』を参照してください。

IBM Campaign アプリケーションの WAR ファイルを WebSphere Application Server 上に配置するには、以下のステップを実行します。

1. システム・テーブルが DB2 にある場合は、データ・ソースのカスタム・プロパティにアクセスします。 **resultSetHoldability** の値を **1** に設定します。

「**resultSetHoldability**」という名前のフィールドが表示されない場合は、その名前のカスタム・プロパティを追加し、その値を **1** に設定します。

2. IBM WAR ファイルをエンタープライズ・アプリケーションとして配置するには、以下のガイドラインに従います。

特に説明されていないものについては、デフォルトの設定を受け入れることができます。

- ブラウズして WAR ファイルを選択するフォームで、「すべてのインストール・オプションおよびパラメータを表示する。」を選択して、「インストール・オプションの選択」ウィザードまたは「新規アプリケーションのインストール」ウィザードを実行します。
 - インストール・ウィザードのステップ 1 で、「**JavaServer Pages** ファイルのプリコンパイル」を選択します。
 - インストール・ウィザードのステップ 3 では、「**JDK ソース・レベル**」を 16 に設定します。16 が使用可能でない場合は、15 を選択します。
 - インストール・ウィザードのステップ 8 では、「**コンテキスト・ルート**」を /Campaign に設定します。
3. サーバーの「**Web コンテナ設定**」 > 「**セッション管理**」セクションで、Cookie を有効にします。
 4. WebSphere Application Server バージョン 8 を使用している場合は、「サーバー」 > 「**WebSphere Application Server**」 > 「サーバー 1」 > 「**セッション管理**」 > 「**Cookie**」を選択し、「**セッション Cookie を HTTPOnly に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します**」のチェック・ボックスをクリアします。

5. WebSphere コンソールで、サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」>「Unica.war」>「セッション管理」>「Cookie を使用可能にする」>「Cookie 名」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
6. 「セッション管理」の「セッション管理のオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。
7. サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」セクションで、配置した WAR ファイルを選択してから「クラス・ロードおよび更新の検出」を選択して、「構成」タブの以下の「一般プロパティ」を設定します。
 - 「クラス・ローダー順序」には、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」を選択します。
 - 「WAR クラス・ローダーのポリシー (WAR class loader policy)」で、「アプリケーション用の単一のクラス・ローダー (Single class loader for application)」を選択します。
8. 配置を開始します。

EAR ファイルから WebSphere Application Server 上に IBM Campaign を配置するには

Campaign が EAR ファイルの中のモジュール (.war ファイル) である場合は、以下の手順を使用して WebSphere Application Server に IBM Campaign アプリケーションを配置します。

以下は、IBM EMM インストーラーを実行したときに EAR ファイルに IBM Campaign を含めた場合に関する手順です。EAR ファイルを配置している場合、EAR ファイルに含まれる個々の製品のインストール・ガイドで詳しく説明される配置のガイドラインにすべて従う必要があります。

IBM Campaign を配置する前に、以下のようになります。

- ご使用の WebSphere のバージョンが、必要なフィックスパックまたはアップグレードも含めて、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料に記載された要件を満たしていることを確認します。
- WebSphere でデータ・ソースとデータベース・プロバイダーを作成したことを確認します。

9 ページの『第 2 章 IBM Campaign のデータ・ソースの準備』を参照してください。

IBM Campaign を EAR ファイルから WebSphere Application Server 上に配置するには、以下のステップを実行します。

1. システム・テーブルが DB2 にある場合は、データ・ソースのカスタム・プロパティにアクセスします。 **resultSetHoldability** の値を **1** に設定します。

「resultSetHoldability」という名前のフィールドが表示されない場合は、その名前のカスタム・プロパティを追加し、その値を **1** に設定します。

2. IBM EAR ファイルをエンタープライズ・アプリケーションとして配置するには、以下のガイドラインに従います。

特に説明されていないものについては、デフォルトの設定を受け入れることができます。

- ブラウズして EAR ファイルを選択するフォームで、「すべてのインストール・オプションおよびパラメーターを表示する。」を選択して、「インストール・オプションの選択」ウィザードまたは「新規アプリケーションのインストール」ウィザードを開始します。
 - インストール・ウィザードのステップ 1 で、「**JavaServer Pages** ファイルのプリコンパイル」を選択します。
 - インストール・ウィザードのステップ 3 では、「**JDK ソース・レベル**」を 16 に設定します。16 が使用可能でない場合は、15 を選択します。必ず、Web モジュール (.war ファイル) ごとに「**JDK ソース・レベル**」を設定してください。
 - インストール・ウィザードのステップ 10 で、「**コンテキスト・ルート**」の値が /Campaign に設定されていることを確認します。正しいコンテキスト・ルート値は、ウィザードで指定されます。例えば、unica.war は /unica に設定され、Campaign.war は /Campaign に設定されます。
3. サーバーの「**Web コンテナ設定**」>「**セッション管理**」セクションで、Cookie を有効にします。
 4. WebSphere Application Server バージョン 8 を使用している場合は、「サーバー」>「**WebSphere Application Server**」>「サーバー 1」>「**セッション管理**」>「**Cookie**」を選択し、「**セッション Cookie を HTTPOnly に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します**」のチェック・ボックスをクリアします。
 5. WebSphere コンソールで、サーバーの「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」>「**UnicaApp**」>「**モジュール管理**」> [配置したモジュール] >「**セッション管理**」>「**Cookie を使用可能にする**」>「**Cookie 名**」セクションを開き、固有のセッション Cookie 名を指定します。
 6. 「**セッション管理**」の「**セッション管理のオーバーライド**」チェック・ボックスを選択します。
 7. サーバーの「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」セクションで、配置した EAR ファイルを選択してから「**クラス・ロードおよび更新の検出**」を選択して、「**構成**」タブの以下の一般プロパティを設定します。
 - 「**クラス・ローダー順序**」: 「**最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)**」を選択します。
 - 「**WAR クラス・ローダー・ポリシー**」: 「**アプリケーションの単一クラス・ローダー**」を選択します。
 8. 配置した EAR ファイルの中の Campaign.war モジュールで以下の設定を指定します。
 - a. 「**エンタープライズ・アプリケーション**」に移動して、EAR ファイル (**UnicaApp**) を選択します。
 - b. 「**モジュール管理**」ページで、**Campaign.war** ファイルを選択します。
 - c. 「**エンタープライズ・アプリケーション**」>「**EAR**」>「**モジュール管理**」>「**WAR**」ページで、次のようにします。
 - 「**開始ウェイト**」を **10000** に設定します。

- 「クラス・ローダー順序」を「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」に設定します。
 - d. 「エンタープライズ・アプリケーション」>「EAR」>「モジュール管理」>「WAR」>「セッション管理」ページで、「Cookie を使用可能にする」を選択します。
 - e. 「エンタープライズ・アプリケーション」>「EAR」>「モジュール管理」>「WAR」>「セッション管理」>「Cookie」ページで、次のようにします。
 - 「Cookie 名」を **CMPJSESSIONID** に設定します。
 - 「Cookie 最大存続期間」では、「現行のブラウザ・セッション」を選択します。
 - f. 「エンタープライズ・アプリケーション」>「EAR」>「モジュール管理」>「WAR」>「セッション管理」ページで、次のようにします。
 - 「オーバーフローの許可」を選択します。
 - 「メモリー内の最大セッション・カウント」に **1000** と入力します。
 - 「セッション・タイムアウト」で「タイムアウトの設定」を選択し、**30** と入力します。
 - g. EAR ファイルから配置しようとするその他の .war ファイルそれぞれについて、同じ設定を定義します。
9. 配置を開始します。

WebLogic への IBM Campaign の配置

IBM EMM 製品を WebLogic 上に配置するには、以下のガイドラインに従ってください。

WebLogic のすべてのバージョン、すべての IBM EMM 製品

- IBM EMM 製品により、WebLogic で使用される JVM がカスタマイズされます。JVM 関連のエラーが発生した場合に、IBM EMM 製品専用の WebLogic インスタンスを作成しなければならないことがあります。
- 始動スクリプト (startWebLogic.cmd) で JAVA_VENDOR 変数を調べて、使用する WebLogic ドメイン用に選択された SDK が Sun SDK であることを確認します。JAVA_VENDOR=Sun に設定されている必要があります。JAVA_VENDOR=BEA に設定されている場合、JRockit が選択されています。JRockit はサポートされていません。選択された SDK を変更するには、WebLogic の資料を参照してください。
- IBM EMM 製品を Web アプリケーション・モジュールとして配置します。
- UNIX システムの場合、グラフィカルなグラフを正常にレンダリングできるように、コンソールから WebLogic を始動する必要があります。コンソールは通常、サーバー稼働しているマシンにあります。しかし、Web アプリケーション・サーバーが別の仕方です。

コンソールがアクセス不能、または存在しない場合は、Exceed を使用してコンソールをエミュレートすることができます。ルート・ウィンドウ・モードまたはシングル・ウィンドウ・モードで UNIX マシンにローカル Xserver プロセスが接続されるように Exceed を構成する必要があります。Exceed を使用して Web アプリケーション・サーバーを始動する場合は、バックグラウンドで Exceed を引

き続き実行させて、Web アプリケーション・サーバーが稼働し続けられるようにしてください。グラフのレンダリングで問題が発生した場合は、IBM テクニカル・サポートに連絡して詳細な指示を求めてください。

Telnet または SSH を介して UNIX マシンに接続すると、グラフのレンダリングで必ず問題が発生します。

- IIS プラグインを使用するように WebLogic を構成する場合は、WebLogic の資料を調べてください。
- 実稼働環境で配置を行う場合、JVM メモリー・ヒープ・サイズ・パラメーターを 1024 に設定するために、setDomainEnv スクリプトに以下の行を追加してください。Set MEM_ARGS=-Xms1024m -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m

WebLogic 11g の場合の追加ステップ

WebLogic 11g の場合には、campaign.war ファイルで以下の変更を行います。

1. campaign.war ファイルを解凍し、WEB_INF ディレクトリー内で weblogic.xml ファイルを見つけます。
2. テキスト・エディターで weblogic.xml を開き、ファイルの session-descriptor セクションに行 `<cookie-http-only>>false</cookie-http-only>` を追加します。

例えば、完成後の session-descriptor セクションは、次のような内容になります。

```
<session-descriptor>
  <session-param>
    <param-name>CookieName</param-name>
    <param-value>CAMPAIGNSESSIONID</param-value>
  </session-param>
  <cookie-http-only>>false</cookie-http-only>
</session-descriptor>
```

3. weblogic.xml ファイルを保存します。
4. WL11g と一緒に AIX 7.1 も使用している場合のみ、解凍された WEB_INF/lib ディレクトリーから xercesImpl.jar ファイルを削除します。
5. campaign.war を配置する前に、この WAR ファイルをビルドして変更内容を含めます。

すべてのバージョンの WebLogic での UNIX システムに関するレポート

Campaign を IBM Contact Optimization と一緒に UNIX システムにインストールした場合、Contact Optimization レポートにグラフを表示できるようにするために、WebLogic Web アプリケーション・サーバーの java.awt.headless JVM プロパティを使用可能にする必要があります。

WebLogic JVM で、最適化レポート内でのグラフ表示を使用可能にするには、以下の手順に従います。

1. WebLogic サーバーが既に稼働中の場合は、シャットダウンします。
2. WebLogic サーバーの起動スクリプト (startWebLogic.sh) を見つけて、任意のテキスト・エディターで開きます。
3. JAVA_OPTIONS パラメーターを変更して以下の値を追加します。

```
-Djava.awt.headless=true
```

4. 起動スクリプトを保存した後、WebLogic サーバーを再始動します。

ステップ: Campaign サーバーを始動する

Campaign サーバーは、直接始動することも、サービスとしてインストールすることもできます。

注: Campaign サーバーを始動するときには、Marketing Platform および Campaign Web アプリケーションが配置されて、実行中である必要があります。

Campaign サーバーを直接始動するには

ご使用のオペレーティング・システムに対応する指示に従ってください。

Windows

Campaign インストール済み環境の bin ディレクトリーにある `cmpServer.bat` ファイルを実行することにより、Campaign サーバーを始動します。`unica_aclsnr.exe` プロセスが「Windows タスク マネージャ」の「プロセス」タブに表示されていれば、それはサーバーが正常に始動したことを示しています。

UNIX

`start` 引数を設定した `rc.unica_ac` プログラムを実行することにより、Campaign サーバーを始動します。このコマンドは、`root` として実行する必要があります。以下に例を示します。

```
./rc.unica_ac start
```

`unica_aclsnr` プロセスが正常に開始したかどうかを判別するには、以下のコマンドを実行します。

```
ps -ef | grep unica_aclsnr
```

始動したサーバーのプロセス ID を判別するには、Campaign インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにある `unica_aclsnr.pid` ファイルを確認します。

Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法

Campaign サーバーを、Windows システムが始動すると必ず自動的に開始される Windows サービスとしてインストールするには、以下のようになります。

1. Campaign インストール・ディレクトリーの下にある bin ディレクトリーを、ユーザー PATH 環境変数に追加します。ユーザーの PATH 環境変数がない場合には、作成します。

このパスを、システム PATH 変数ではなく、必ずユーザー PATH 変数に追加するようにしてください。

Campaign bin ディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある場合には、それを削除します。Campaign サーバーをサービスとしてインストールするには、そのディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある必要はありません。

2. サーバーがサービスとしてインストールされている旧バージョンの Campaign からアップグレードする場合には、サービスを停止してください。
3. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーを Campaign インストールの下の bin ディレクトリーに変更します。
4. 次のコマンドを実行し、Campaign サーバー・サービスを作成します。
`unica_ac1snr -i`

サービスが作成されます。

注: CAMPAIGN_HOME がシステム環境変数として作成されたことを確認してから、Campaign サーバー・サービスを開始します。

第 6 章 配置後の Campaign の構成

Web アプリケーションを配置した後に、このセクションで説明されている作業を実行する必要があります。

さらに、IBM EMM レポート作成機能を使用する場合には、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」で説明されているタスクを実行する必要があります。

注: ホストされた E メールに対して IBM eMessage を使用可能にする予定である場合、標準の eMessage パフォーマンス・レポートを表示するには、IBM EMM レポート作成機能を使用する必要があります。

ステップ: Campaign リスナーが稼働していることを確認する

ユーザーがどの Campaign 機能进行操作する場合でも、その前に Campaign リスナーが稼働していなければなりません。リスナーは、ログインごとおよびアクティブ・フローチャートごとに、別個の `unica_acsvr` プロセスを自動で作成します。例えば、あるユーザーがログインしてフローチャートを開くと、リスナーは `unica_acsvr.exe` のインスタンスを 2 つ作成します。

Campaign リスナーが稼働していることを確認するには、以下の手順を使用します。

1. ご使用のオペレーティング・システムに応じた手順を使用してください。

Windows では、「Windows タスク マネージャー」の「プロセス」タブで、`unica_aclsnr.exe` を見つけます。

UNIX では、`ps` コマンド (例えば、`ps -ef | grep unica_aclsnr`) を使用して、Campaign サーバーを見つけてみます。

2. リスナーが稼働していない場合は、次のようにして再始動します。

Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の `bin` ディレクトリーにある、`cmpServer.bat` スクリプトを実行します。

UNIX の場合は、システム・プロンプトでコマンド `rc.unica_ac start` を入力します。

リスナーの自動始動など、リスナーの稼働に関する重要な詳細は、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

ステップ: Campaign システム・ユーザーをセットアップする

システム・ユーザーとは、IBM EMM アプリケーションで使用するよう構成された IBM ユーザー・アカウントです。

ユーザーにログイン資格情報を求めるプロンプトを繰り返し出さないようにするためには、システム・ユーザーを 1 つ以上のデータ・ソースに関連付けることができ

ます。データ・ソースはそれぞれに、ユーザー名およびパスワードを指定します。そのため、データ・ソースを参照することによって、データベースやその他の保護リソースにアクセスするためのユーザー名およびパスワードを提供できます。複数のデータ・ソースをシステム・ユーザー・アカウントの構成に追加することで、そのシステム・ユーザーが複数のデータベースにアクセスできるようにすることができます。

Campaign では、システム・ユーザーが、システム・テーブルやその他のデータ・ソースにアクセスするためのログイン資格情報を保有します。

既存または新規の IBM EMM ユーザー・アカウントを使用して、以下に説明するデータ・ソースに対する資格情報を保存します。

IBM EMM の「**セットアップ**」>「**ユーザー**」領域で、IBM EMM ユーザーをセットアップして、ユーザーにデータ・ソースを割り当てます。その方法についての説明は、オンライン・ヘルプの該当するセクションを参照してください。

以下のデータ・ソースに対する資格情報を保有するユーザー・アカウントをセットアップします。

- Campaign システム・テーブル (UA_SYSTEM_TABLES)
- すべての顧客 (ユーザー) テーブル

UNIX では、システム・ユーザーの「**代替ログイン**」属性に、Campaign の UNIX ユーザーと特権を共有するグループに属するユーザーの UNIX アカウントを入力します。

注: 複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに固有のシステム・ユーザーが必要です。複数のパーティションで同じシステム・ユーザーを使用することはできません。

ステップ: 「構成」 ページでデータ・ソース・プロパティーを追加する

Campaign データ・ソースごとに、適切なデータ・ソース・テンプレートを使用して、「構成」 ページにデータ・ソース構成プロパティーを追加する必要があります。IBM インストーラーを実行すると、Campaign インストーラーは Marketing Platform データベースに指定されたデータベース・タイプに応じたテンプレートをインポートします。

追加のデータベース・タイプに他のデータ・ソース・テンプレートが必要な場合は、Marketing Platform configTool ユーティリティーを使用して、それらのテンプレートを手動でインポートする必要があります。使用するデータベースの各タイプに応じたテンプレートを、必要な数だけインポートできます。

例えば、Marketing Platform および Campaign のインストール済み環境で、以下のデータベースを使用しているとします。

- Oracle - システム・テーブル
- DB2 - 顧客 (ユーザー) テーブル
- DB2 - 追加の顧客 (ユーザー) テーブル

この場合は、2 セットの顧客 (ユーザー) テーブルに対応した DB2Template.xml テンプレートをインポートする必要があります。

Marketing Platform システム・テーブルと Campaign システム・テーブルのデータベースが同じデータベース・タイプである場合、インストーラーは自動的に、これらのシステム・テーブルに使用するテンプレートをインポートします (この例では、Oracle テンプレートをインポートします)。

手順については、『データ・ソース・テンプレートをインポートするには』を参照してください。

テンプレートから新しいカテゴリを作成すると、新しいデータ・ソース構成プロパティのセットが作成されます。それぞれのタイプのデータ・ソースごとに、必要なだけ新しいカテゴリを作成します。上記の例では、Oracle テンプレートで 1 つの新規カテゴリを作成し、DB2 テンプレートで 2 つの新規カテゴリを作成します。『データ・ソース・テンプレートを複製するには』を参照してください。

データ・ソース・プロパティを追加した後は、テンプレートから作成したカテゴリのデータ・ソース構成プロパティを設定します。

手順については、46 ページの『ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する』を参照してください。

データ・ソース・テンプレートをインポートするには

Campaign データ・ソース・テンプレートは、Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリにあります。

注: ユーザー・テーブル用にサポートされているデータベース・タイプの中には、Campaign システム・テーブル用にはサポートされていないタイプがいくつかあります。Campaign システム・テーブルのデータ・ソース (UA_SYSTEM_TABLES) は、Oracle、DB2、および SQLServer でのみサポートされます。

テンプレートをインポートおよびエクスポートするには、Marketing Platform configTool ユーティリティを使用します。このユーティリティは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリにあります。configTool について十分に理解していない場合は、このタスクを実行する方法の詳細について、91 ページの『configTool ユーティリティ』を参照してください。

以下に、Oracle テンプレートをデフォルト・パーティション (Windows 環境) にインポートする場合に使用するコマンドの一例を示します。

```
configTool -i -p "Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f  
full_path_to_directory_containing_your_Oracle_template%OracleTemplate.xml
```

データ・ソース・テンプレートを複製するには

1. 「構成」ページで、複製するデータ・ソース・テンプレートにナビゲートします。

他のカテゴリとは異なり、テンプレート・カテゴリのラベルは斜体になっていて、括弧で囲まれています。

2. データ・ソース・テンプレートをクリックします。

「テンプレートからのカテゴリの作成」ページが表示されます。

3. 「新しいカテゴリ名」フィールドに名前を入力します (必須)。

注: Campaign のシステム・テーブルのデータ・ソース・カテゴリ名は、`UA_SYSTEM_TABLES` であることが必須です。

4. 必要に応じて、新しいカテゴリに含まれるプロパティを編集します。また、これを後で行うこともできます。
5. 「保存と終了」をクリックして、新規の構成を保存します。

新規カテゴリがナビゲーション・ツリーに表示されます。

次のステップで、『ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する』で説明しているプロパティを設定します。

ステップ: 「構成」ページで必須 Campaign プロパティを設定する

このセクションでは、Campaign の基本インストールで「構成」ページに設定する必要のある最低限の構成プロパティについて説明します。これらの必須プロパティを、このセクションで説明されているように設定します。

Campaign の「構成」ページには、オプションで調整可能な重要な機能を実行するためのプロパティもあります。

ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する

Campaign データ・ソースごとに、このセクションにリストするプロパティを設定する必要があります。これらのデータ・ソースは、Campaign システム・テーブル・データベース、および Campaign で使用する予定のすべての顧客 (ユーザー) データベースです。

注: Campaign のシステム・テーブルのデータ・ソース・カテゴリ名は、`UA_SYSTEM_TABLES` であることが必須です。

値の設定について詳しくは、これらのプロパティのコンテキスト・ヘルプを参照するか、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

- `ASMUserForDBCredentials`。このプロパティには、43 ページの『ステップ: Campaign システム・ユーザーをセットアップする』で Campaign システム・ユーザーとして既に作成したユーザーを設定する必要があります。
- `DSN`。SQL サーバーの場合、このプロパティには、作成した DSN (データ・ソース名) を設定します。Oracle および DB2 の場合、このプロパティにはデータベース名または SID (サービス) 名を設定します。
- `JndiName`。このプロパティには、アプリケーション・サーバーに作成した、この特定のデータ・ソースに接続するための JNDI を設定します。
- `SystemTableSchema`。SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。

- OwnerForTableDisplay。SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。

ステップ: 追加プロパティを設定する

Campaign の基本インストールでは、データ・ソース・プロパティを作成して設定する他に、「構成」ページに以下のプロパティを設定する必要があります。

- Campaign > unicaACListener > serverHost
- Campaign > unicaACListener > serverPort
- デフォルト・パーティションには、Campaign > partitions > partition1 のカテゴリーに、必要に応じた値を設定します。

これらの 2 つのプロパティのいずれかを変更した場合は、常に Campaign リスナーを再始動してからでないと、変更が適用されないことに注意してください。

ステップ: Campaign のユーザー・テーブルをマップする

ユーザー・テーブルのマッピングは、外部データ・ソースを Campaign で利用できるようにするプロセスです。一般に、ユーザー・テーブルには、企業の顧客、見込み顧客、あるいは製品に関する情報が格納されます。データベース表または ASCII フラット・ファイルデータをデータ・ソースとして使用できます。構成したデータ・ソースのデータをフローチャート内のプロセスで利用できるようにするには、それらのデータ・ソースをすべてマップする必要があります。

ユーザー・テーブルをマップする方法については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

注: ユーザー・テーブルは、システム・テーブルとは異なります。大半の Campaign システム・テーブルは、システム・テーブル・データ・ソース名 `UA_SYSTEM_TABLES` が使用されていれば、初回のインストールと構成のときに自動的にマップされます。接続上の問題によりシステム・テーブルを手動でマップする必要がある場合は、Campaign からログアウトし、テーブルをマップしてから、再びログインしてください。

ステップ: Campaign インストールを確認する

Campaign をインストールおよび構成するためのすべてのステップを実行し終わったら、Campaign Web アプリケーションを配置して、それが終わった後に Campaign を構成します。これで、インストールを検査する準備が整います。

Campaign 管理者役割 (`asm_admin` など) に既に存在するユーザーとして IBM EMM にログインします (まだこれを行っていない場合)。「設定」>「ユーザー」で、新規ユーザーに少なくとも 1 つのセキュリティの役割 (例えば、グローバル・ポリシー/管理) を割り当てます。新規ユーザーに役割を割り当てた後、その新規ユーザーとして Campaign にログインできます。

インストール済み環境を確認するには、次の手順に従ってください。

1. IBM EMM にログインします。

2. 「設定」>「キャンペーン設定」>「テーブル・マッピングの管理」ウィンドウで、すべてのシステム・テーブルがあることを確認します。
3. キャンペーンを作成し、そのキャンペーンにフローチャートを作成します。

ステップ: IBM アプリケーションを統合する場合のオプションの構成を行う

IBM Campaign は、さまざまな IBM アプリケーションを統合します。このセクションでは、統合を確立するために必要な構成およびプロセスについて説明します。

ステップ: IBM Marketing Operations との統合のためのプロパティを設定する

Campaign を Marketing Operations と統合するには、「Campaign」>「partitions」>「partition[n]」>「server」>「internal」>「MO_UC_integration」プロパティを「Yes」に設定します。

さらに、MO_UC_BottomUpTargetCells、IBM Marketing Operations - Offer integration、および UC_CM_integration というプロパティを調整します。詳しくは、「IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガイド」を参照してください。

Affinium Campaign 7.x で作成され、Affinium Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーン（すなわち、レガシー・キャンペーン）にアクセスできるようにするには、「Campaign」>「partitions」>「partition1」>「server」>「internal」>「Legacy_campaigns」プロパティを「Yes」に設定します。

Campaign インストール済み環境に複数のパーティションがある場合、統合を有効にする各パーティションで、これらのプロパティを設定します。

ステップ: eMessage を統合するための起動プロセスを開始する

IBM eMessage が Campaign と統合することにより、マーケティング・データベースの情報を使用して、顧客および見込み顧客に合わせて個人別にパーソナライズしたマーケティングの E メール・メッセージを作成、送信、および追跡できます。必要な E メール送信用および追跡用のリソースは、IBM がホストします。顧客レコードは、Campaign を使用してローカルで管理します。

Campaign インストール済み環境に eMessage を統合する場合は、ホストされた E メール・アカウントの設定および IBM EMM Hosted Services への接続の構成を IBM に依頼する必要があります。IBM は、ホストされた E メール・アカウントをプロビジョンし、主要なインターネット・サービス・プロバイダーの間で E メール・マーケティングの評判を確立するための起動プロセスの間、お客様を支援します。起動プロセスの間に、IBM Marketing Platform および Campaign の構成を変更する必要があります。ホストされた Eメールの起動プロセス、および実行しなければならない構成について詳しくは、6 ページの『eMessage と Campaign の統合』および「IBM eMessage 起動および管理者ガイド」を参照してください。

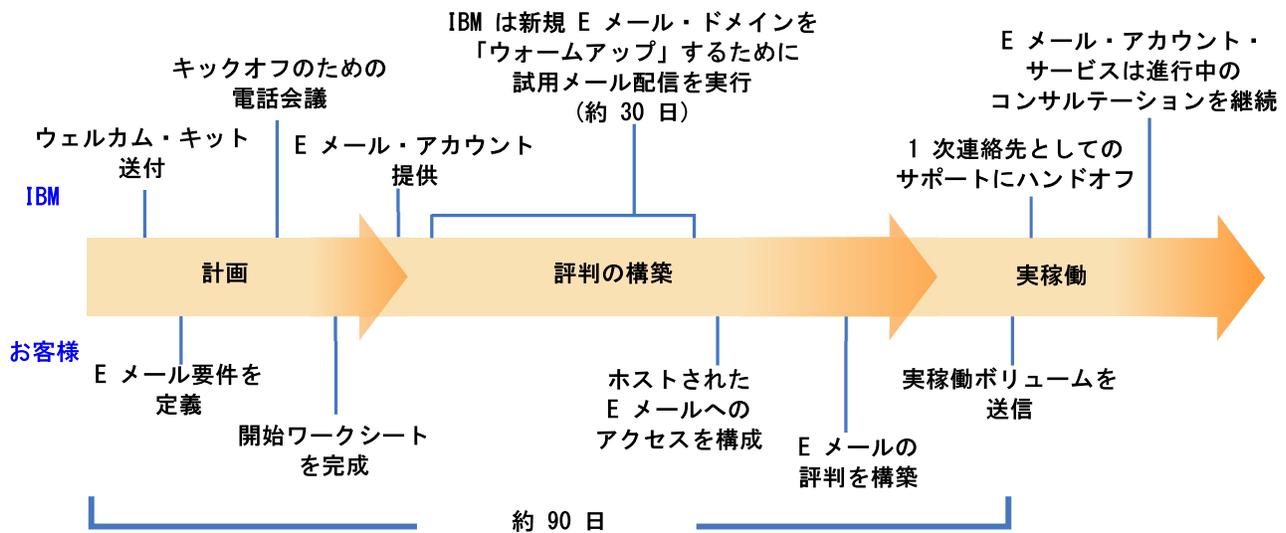
eMessage の起動プロセスの概要

IBM Campaign で E メール機能をアクティブにすることで、ターゲットを絞り込み、追跡可能な E メール・マーケティング・キャンペーンを行うことができます。

Campaign は、米国および英国のデータ・センターでホストされているリソースを介して、IBM eMessage から提供される E メール機能を使用します。これらのリソースにアクセスするためのアカウントは、eMessage サブスクリプションに含まれます。

IBM は、ホストされた E メール・アカウントを作成した後に、起動プロセスを開始します。IBM は、お客様が eMessage を十分に理解し、ホストされた E メール・リソースに接続し、主要なインターネット・サービス・プロバイダー (ISP) の間で正当な E メール・マーケティング担当者としての評判を確立できるよう支援します。

プロセスは、3 つのフェーズで進められます。IBM 専門サービス・チームおよび E メール・アカウント・サービス・チームが、この過程を案内します。



起動プロセスの間中は、専門サービス・コンサルタントが IBM との主な連絡窓口となります。アカウント起動プロセスが完了すると、専門サービス・コンサルタントが主要なサポートとしての役割を IBM 製品サポート・チームに渡します。

担当の E メール・アカウント・サービス (EAS) コンサルタントは、E メール関連の問題を専門に支援を提供します。E メール・マーケティング・キャンペーンが対象受信者に常に届けられるようにするためには、主要なインターネット・サービス・プロバイダー (ISP) の間で好ましい Eメールの評判を確立することが重要です。メール配信の実行を開始する際に、EAS コンサルタントはメール配信の配信可能パフォーマンスを検討し、Eメールの評判を着実に構築していくために最適な方法を提案します。

第 7 章 Campaign での複数のパーティションの構成

Campaign 製品ファミリーでは、複数のパーティションを使用して、異なるユーザー・グループに関連付けられているデータを保護する方法が確保されています。

複数のパーティションで作業を行うように Campaign または関連する IBM EMM アプリケーションを構成すると、各パーティションはアプリケーションの異なるインスタンスのようにアプリケーション・ユーザーには見えます。他のパーティションが同じシステム上に存在するということは分かりません。

IBM EMM アプリケーションを Campaign と一緒に操作する場合、アプリケーションを構成できるのは、Campaign インスタンスが既に構成されているパーティションの中だけです。各パーティション内のアプリケーション・ユーザーがアクセスできるのは、同じパーティション内で Campaign 用に構成されている Campaign 機能、データ、顧客テーブルだけです。

パーティションの利点

各パーティションには固有の Campaign システム・テーブルのセットがあるため、複数のパーティションがあると、ユーザーのグループの間に強力なセキュリティーをセットアップするのに役立ちます。ユーザーのグループがデータを共有する必要がある場合は、複数のパーティションの使用は推奨されません。

各パーティションには固有の構成設定があるため、ユーザーのグループごとに Campaign をカスタマイズできます。ただし、すべてのパーティションは同じインストール・バイナリーを共有します。したがって、複数のインストールを個別に行う場合と比べ、インストールおよびアップグレードの作業は最小限になります。

パーティションのユーザー割り当て

パーティションへのアクセスは、Marketing Platform グループのメンバーシップによって管理されます。ユーザーをパーティションのメンバーにするには、ユーザーをそのパーティションに割り当てられたグループのメンバーにします。

パーティションのスーパーユーザーを除き、各 IBM ユーザーは、1 つのパーティションにのみ属することができます。複数のパーティションへのアクセスが必要なユーザーは、パーティションごとに個別の IBM ユーザー・アカウントが必要です。

Campaign パーティションが 1 つしかない場合、Campaign に対するアクセス権限を持たせるために、ユーザーをそのパーティションに明示的に割り当てる必要はありません。

パーティション・スーパーユーザー

Marketing Platform のユーザー全体でセキュリティーを管理するには、システム内のすべてのセキュリティー設定およびユーザー・アカウントにアクセスできるユーザー・アカウントが存在していなければなりません。

デフォルトでは、このユーザー・アカウントは `platform_admin` です。このユーザー・アカウントは、特定の 1 つのパーティションには属さず、すべてのパーティション内のすべてのユーザー・アカウントにアクセスできます。

IBM 管理者は、同じアクセス・レベルを持つ追加ユーザーを作成できます。パーティション・スーパーユーザーになるためには、アカウントが Marketing Platform に対する管理アクセス権限を持ち、「ユーザー」、「ユーザー・グループ」、および「ユーザーの権限」ページに対するフルアクセス権限を持つ必要があります。パーティション・スーパーユーザーには、製品固有のセキュリティー・ページ (Campaign セキュリティー・ページなど) に対するアクセス権限は不要です。

パーティションのデータ・アクセス

複数のパーティションを使用した構成では、パーティションに以下のセキュリティー特性が備わります。

- ユーザーは、パーティションに割り当てられたグループのメンバーでなければ、そのパーティションにはアクセスできません。
- あるパーティションのユーザーは、他のいずれのパーティションのデータも表示したり、変更したりすることはできません。
- Campaign の参照ダイアログ・ボックスから、ユーザーがパーティションのルート・ディレクトリーより上位のファイル・システムにナビゲートすることはできません。例えば、`partition1` と `partition2` という名前の 2 つのパーティションがあり、ユーザーが `partition1` に関連付けられたグループに属しているとした場合、このユーザーは、ダイアログ・ボックスから `partition2` のディレクトリー構造をナビゲートすることはできません。

複数のパーティションのセットアップ

このセクションでは、Campaign に追加のパーティションを構成するために実行する必要があるタスクについて説明します。

複数のパーティションを構成する場合の前提条件

Campaign に追加のパーティションを構成する前に、構成するパーティションごとに以下のタスクを実行します。

- 9 ページの『ステップ: Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する』
- 10 ページの『ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する』
- 11 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する』

パーティションのデータ・ソースの準備

システム・テーブル・データベース、およびパーティションに必要な他のすべてのデータ・ソースを作成します。その後、データ・ソースにアクセスするために必要な JDBC および ODBC 接続またはネイティブ接続を構成します。データ・ソースの準備については、9 ページの『第 2 章 IBM Campaign のデータ・ソースの準備』を参照してください。

パーティションのシステム・テーブルの作成とデータの追加

パーティションごとに、システム・テーブルを格納するための異なるスキーマをデータベースに作成します。

システム・テーブルを作成してデータを追加するには、Campaign に同梱されているデータベース固有のスクリプトを使用します。

追加パーティションごとのディレクトリー構造の作成

この手順では、ファイル・システム内にパーティション・ディレクトリーを作成する方法を説明します。

注: バックアップとして機能するように、元の partition1 ディレクトリーのままのコピーを保存してください。

1. Campaign インストール済み環境の partitions ディレクトリーで、追加するパーティションごとに、すべてのサブディレクトリーが含まれるようにデフォルト partition1 ディレクトリーの複製を作成します。
2. 各パーティション・ディレクトリーに一意の名前を付けます。後で「構成」ページでパーティションの構成ツリーを作成するときには、ここで設定する名前と完全に同じ名前をパーティションに使用します。

例えば、2 番目のパーティションを作成するために、Campaign/partitions/partition2 という名前のディレクトリーを作成した場合、「構成」ページで構成ツリーを作成するときには、名前「partition2」を使用して、このパーティションを識別しなければなりません。

3. 複製パーティション・サブディレクトリー内に存在するすべてのファイルを削除します。

デフォルト・パーティションを複製するには

以下の手順で、-s オプションを設定して partitionTool ユーティリティーを使用する方法を説明します。このオプションを使用しない場合は、この手順を実行する前に、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。

1. JAVA_HOME 環境変数を、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトに設定するか、または partitionTool ユーティリティーを実行するコマンド・ライン・ウィンドウで設定します。
2. コマンド・ライン・ウィンドウを開き、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーからユーティリティーを実行します。適切なコマンドおよびオプション（「Marketing Platform 管理者ガイド」で説明）を使用して、目的の結果を達成します。

以下に例を示します。

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2
```

3. 作成する必要がある新しいパーティションごとに、この手順を繰り返します。
4. 完了したら、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを停止して再始動し、作成されたグループを確認します。

このユーティリティーの使用方法について詳しくは、98 ページの『partitionTool ユーティリティー』を参照してください。

新しいパーティション構造の作成

新しいパーティションごとに、「構成」ページで New partitionTemplate を使用してパーティション構造を作成します。

1. 「構成」ページで、「キャンペーン」>「パーティション」にナビゲートして、(partitionTemplate) をクリックします。

リストに (partitionTemplate) プロパティが表示されていない場合には、configTool ユーティリティーで以下のようなコマンドを使用して、パーティション・テンプレートをインポートしてください。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions"  
-f <CAMPAIGN_HOME>/conf/partitionTemplate.xml
```

<CAMPAIGN_HOME> は、Campaign インストール済み環境への実際のパスで置き換えます。

configTool ユーティリティーは、IBM Marketing Platform インストール済み環境の tools ディレクトリーにあります。このユーティリティーについて詳しくは、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

右側のペインに、「新しいカテゴリー名」フィールドが空の状態では「partitionTemplate」ペインが表示されます。

2. 新しいパーティションの名前を入力します。この名前には、53 ページの『追加パーティションごとのディレクトリー構造の作成』でファイル・システムにパーティションのディレクトリー構造を作成したときと同じ名前を使用します。
3. 「変更の保存」をクリックします。

パーティション・テンプレートと同じカテゴリーとプロパティを持つ新しいパーティション構造が表示されます。

パーティションのデータ・ソース・プロパティの構成

作成するパーティションごとに、そのパーティションのデータ・ソース・プロパティを「構成」ページで構成する必要があります。

ステップ: 「構成」ページでデータ・ソース・プロパティを追加する

Campaign データ・ソースごとに、適切なデータ・ソース・テンプレートを使用して、「構成」ページにデータ・ソース構成プロパティを追加する必要があります。

す。IBM インストーラーを実行すると、Campaign インストーラーは Marketing Platform データベースに指定されたデータベース・タイプに応じたテンプレートをインポートします。

追加のデータベース・タイプに他のデータ・ソース・テンプレートが必要な場合は、Marketing Platform configTool ユーティリティーを使用して、それらのテンプレートを手動でインポートする必要があります。使用するデータベースの各タイプに応じたテンプレートを、必要な数だけインポートできます。

例えば、Marketing Platform および Campaign のインストール済み環境で、以下のデータベースを使用しているとします。

- Oracle - システム・テーブル
- DB2 - 顧客 (ユーザー) テーブル
- DB2 - 追加の顧客 (ユーザー) テーブル

この場合は、2 セットの顧客 (ユーザー) テーブルに対応した DB2Template.xml テンプレートをインポートする必要があります。

Marketing Platform システム・テーブルと Campaign システム・テーブルのデータベースが同じデータベース・タイプである場合、インストーラーは自動的に、これらのシステム・テーブルに使用するテンプレートをインポートします (この例では、Oracle テンプレートをインポートします)。

手順については、45 ページの『データ・ソース・テンプレートをインポートするには』を参照してください。

テンプレートから新しいカテゴリを作成すると、新しいデータ・ソース構成プロパティのセットが作成されます。それぞれのタイプのデータ・ソースごとに、必要なだけ新しいカテゴリを作成します。上記の例では、Oracle テンプレートで 1 つの新規カテゴリを作成し、DB2 テンプレートで 2 つの新規カテゴリを作成します。45 ページの『データ・ソース・テンプレートを複製するには』を参照してください。

データ・ソース・プロパティを追加した後は、テンプレートから作成したカテゴリのデータ・ソース構成プロパティを設定します。

手順については、46 ページの『ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する』を参照してください。

ステップ: データ・ソース・プロパティを設定する

Campaign データ・ソースごとに、このセクションにリストするプロパティを設定する必要があります。これらのデータ・ソースは、Campaign システム・テーブル・データベース、および Campaign で使用する予定のすべての顧客 (ユーザー) データベースです。

注: Campaign のシステム・テーブルのデータ・ソース・カテゴリ名は、UA_SYSTEM_TABLES であることが必須です。

値の設定について詳しくは、これらのプロパティのコンテキスト・ヘルプを参照するか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

- **ASMUserForDBCredentials**。このプロパティには、43 ページの『ステップ: Campaign システム・ユーザーをセットアップする』で Campaign システム・ユーザーとして既に作成したユーザーを設定する必要があります。
- **DSN**。SQL サーバーの場合、このプロパティには、作成した DSN (データ・ソース名) を設定します。Oracle および DB2 の場合、このプロパティにはデータベース名または SID (サービス) 名を設定します。
- **JndiName**。このプロパティには、アプリケーション・サーバーに作成した、この特定のデータ・ソースに接続するための JNDI を設定します。
- **SystemTableSchema**。SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。
- **OwnerForTableDisplay**。SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。

システム・ユーザーのセットアップ

システム・ユーザーとは、IBM EMM アプリケーションで使用するよう構成された IBM EMM ユーザー・アカウントです。IBM EMM アプリケーションには、以下の属性を使用して構成されたシステム・ユーザー・アカウントが必要になる場合があります。

- システム・テーブルやその他のデータ・ソースにアクセスするためのログイン資格情報。
- システム内でオブジェクトを作成、変更、および削除するための特定の権限。

ユーザーにログイン資格情報を求めるプロンプトを繰り返し出さないようにするためには、システム・ユーザーを 1 つ以上の Marketing Platform データ・ソースに関連付けることができます。データ・ソースはそれぞれに、ユーザー名およびパスワードを指定します。そのため、データ・ソースを参照することによって、データベースやその他の保護リソースにアクセスするためのユーザー名およびパスワードを提供できます。複数のデータ・ソースをシステム・ユーザー・アカウントの構成に追加することで、そのシステム・ユーザーが複数のデータベースにアクセスできるようになることができます。

IBM EMM アプリケーションのシステム・ユーザーをセットアップするには、このセクションの情報を使用してください。

新規ユーザーのセットアップおよびユーザーへのデータ・ソースの割り当てに関する一般手順については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign システム・ユーザー

既存または新規のユーザー・アカウントを使用して、以下のデータ・ソースに対する資格情報を保存します。

- Campaign システム・テーブル
- すべての顧客 (ユーザー) テーブル

UNIX では、システム・ユーザーの「代替ログイン」属性に、Campaign の UNIX ユーザーと特権を共有するグループに属するユーザーの UNIX 名を入力します。

注: 複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに固有のシステム・ユーザーが必要です。複数のパーティションで同じシステム・ユーザーを使用することはできません。

複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの構成

複数のパーティションがある Campaign、eMessage、または Interact を使用する場合は、パーティションごとに IBM Cognos レポート・パッケージを構成する必要があります。手順については、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

複数のパーティションを使用する場合の次の手順

Campaign に構成したパーティションを使用可能にするには、以下の管理タスクを完了する必要があります。

- 各パーティションの管理ユーザーに役割を割り当てる - partitionTool ユーティリティーは、作成するパーティションごとに、デフォルトの管理ユーザーを作成します。「ユーザーの役割と権限」ページで、新規ユーザーに少なくとも 1 つのセキュリティの役割 (例えば、グローバル・ポリシー/管理) を割り当てます。新規ユーザーに役割を割り当てた後、その新規ユーザーとして Campaign パーティションにログインできます。
- 各パーティションにグループを割り当てる - 各パーティションに割り当てるグループを決定します。詳しくは、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

複数の Campaign パーティションで IBM eMessage を使用可能にする予定の場合は、Campaign パーティションごとに対応する eMessage パーティションを構成する必要があります。eMessage の追加パーティションの作成について詳しくは、59 ページの『第 8 章 eMessage での複数のパーティションの構成』を参照してください。

第 8 章 eMessage での複数のパーティションの構成

eMessage をインストールすると、Marketing Platform に eMessage のデフォルト・パーティションが作成されます。eMessage の追加のパーティションを構成できません。eMessage に作成する各パーティションは、Campaign に作成されたパーティションと連動します。

注: eMessage に複数のパーティションを構成するには、それぞれに対応するパーティションを Campaign に構成する必要があります。

eMessage に新しいパーティションを追加するには、eMessage および Campaign の Marketing Platform 構成に変更を加える必要があります。

重要: eMessage および Campaign の構成を変更したら、Campaign をホストする Web アプリケーション・サーバーを再始動し、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動する必要があります。Campaign リスナーを再始動しなければならない場合もあります。

変更を加える前に、既存の構成をバックアップしておいてください。

eMessage のパーティションの作成手順

eMessage の新しいパーティションを作成する前に、Campaign および eMessage のパーティションに関するすべての 61 ページの『eMessage 内の複数のパーティションに関する要件』を満たしたことを確認します。Marketing Platform の構成には、eMessage に追加するパーティションと完全に同じ名前を使用する Campaign のパーティションが存在している必要があります。

eMessage の新規パーティションを作成するには、以下の手順に従います。

1. 62 ページの『ステップ: eMessage の新しいパーティションを作成する』
2. 63 ページの『ステップ: パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する』
3. 66 ページの『ステップ: IBM EMM Hosted Services へのパーティション・アクセスを構成する』
4. 67 ページの『ステップ: 新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする』
5. 67 ページの『ステップ: パーティションの RLU の場所を指定する』
6. 68 ページの『ステップ: システム・コンポーネントを再始動する』
7. 69 ページの『ステップ: パーティションの構成および接続をテストする』

IBM eMessage のパーティションについて

eMessage のパーティションを作成することで、異なるユーザーのグループごとにデータを分離して保護できます。各パーティションは、eMessage の個別のインスタンスとしてユーザーに表示されます。同じシステムに他のパーティションが存在することを示すものはありません。各パーティションは、それぞれに固有の構成プロパティーのセットを持つため、ユーザーのグループごとに eMessage をカスタマイズできます。

各パーティション内のユーザーは、そのパーティションに構成されている機能、データ、および顧客テーブルにのみアクセスすることができます。例えば、partition1 および partition2 という名前のパーティションを作成した場合、partition1 内で作業している eMessage ユーザーは、partition1 内に構成されている顧客テーブルから E メール受信者を選択することはできますが、partition2 内に構成されている E メール受信者を選択することはできません。IBM は、ユーザーがデータを共有する必要がある場合には、複数のパーティションを作成することを推奨していません。

複数のパーティションで作業する場合は、eMessage のパーティションに固有の特性、および eMessage のパーティションが Campaign のパーティションにどのように関係するかを理解する必要があります。また、eMessage の複数のパーティションを作成して構成する際のワークフローを十分に理解する必要があります。

eMessage のパーティションの重要な特性

eMessage に新しいパーティションを作成して構成するときには、以下の点に注意してください。

- eMessage のパーティションを作成する方法は、Campaign のパーティションを作成する方法とは異なります。

eMessage に新しいパーティションを作成するには、Marketing Platform の eMessage 構成プロパティーで使用可能なパーティション・テンプレートを使用します。

- 各 eMessage パーティションの名前は、対応する Campaign パーティションの名前と完全に一致している必要があります。
- eMessage に作成する各パーティションは、IBM EMM Hosted Services に接続可能でなければなりません。

パーティションごとに個別の IBM EMM Hosted Services アカウントを要求する必要があります。アカウントに関連付けられたユーザー名とパスワードが、IBM から提供されます。eMessage が IBM EMM Hosted Services に接続する際に、これらのアクセス資格情報を自動的に提供できる Marketing Platform データ・ソースを構成する必要があります。

アカウントの要求方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign のパーティションとの関係

eMessage の各パーティションは、Marketing Platform で Campaign に対して作成された特定のパーティションと連動します。Campaign パーティションは、以下を提供します。

- eMessage システム・テーブルを格納する Campaign スキーマ
- パーティション内の Campaign のファイル構造。これには、eMessage が受信者リストを作成および処理するために使用するディレクトリーも含まれます。
- パーティション内での受信者リストの作成、および eMessage の使用可能化に関連する構成プロパティ

eMessage は、特定のパーティション内の Campaign と連動するため、eMessage と Campaign のパーティション構造が同じ名前を指定していなければなりません。パーティション名は、完全に一致する必要があります。

eMessage 内の複数のパーティションに関する要件

eMessage のパーティションを作成して構成する前に、eMessage および Campaign の以下の要件を満たす必要があります。

eMessage の要件

eMessage に複数のパーティションを作成する前に、eMessage に関する以下の作業を完了してください。

- IBM サポートに連絡して、各パーティションのアカウントと資格情報を要求します。

パーティションごとに別個の IBM EMM Hosted Services アカウントとアクセス権限の資格情報が必要です。詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

- パーティションの Campaign スキーマに作成する予定の eMessage システム・テーブルにアクセス可能なシステム・ユーザーを作成します。

Campaign パーティション用に作成したシステム・ユーザーを更新して、そのユーザーも eMessage システム・テーブルにアクセスできるようにすることが可能です。

Campaign の要件

eMessage に複数のパーティションを作成する前に、Campaign で以下の作業を完了してください。

- eMessage 用に作成するパーティションと連動するパーティションを Campaign に作成します。

パーティションの名前を記録します。

- Campaign パーティション内に Campaign システム・テーブルを作成します。
- パーティション内のシステム・テーブルにアクセスするシステム・ユーザーを構成します。

複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに固有のシステム・ユーザーが必要です。複数のパーティションで同じシステム・ユーザーを使用することはできません。

ステップ: eMessage の新しいパーティションを作成する

IBM インストーラーは、初期インストール時に eMessage 構成プロパティとデフォルト・パーティションを登録します。デフォルト・パーティションには、追加パーティションを作成するためにコピーできるテンプレートが組み込まれています。

eMessage の新規パーティションを作成するには、次のようにします。

1. 「eMessage」>「partitions」>「(partition)」にナビゲートして、パーティション・テンプレートを複製します。
2. 新しいパーティションに名前を付けます。

注: eMessage では、作成後のパーティションの削除をサポートしていません。

パーティション・テンプレートの識別

「構成」ページでは、デフォルト・パーティションのナビゲーション・ツリーに eMessage パーティション・テンプレートが表示されます。ツリー内でパーティション・テンプレートを識別できるように、パーティション・テンプレートのラベルは括弧で囲まれた斜体となっています。

新規パーティションの命名

新しいパーティションに名前を付ける際には、以下の制約が適用されます。

- 名前は、ツリー内で兄弟となっているカテゴリ（つまり、同じ親カテゴリを共有するカテゴリ）の間で一意でなければなりません。
- パーティション名をピリオドで開始することはできません。さらに、パーティション名に以下の文字を使用することはできません。

!	^
"	<
,	>
#	=
\$?
%	@
&	[
(]
)	{
*	}
+	\
:	/
;	
'	`
	~

注: eMessage は特定のパーティション内の Campaign と連動するため、eMessage と Campaign のパーティションは同じパーティション名を指定していなければなりません。

ステップ: パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する

eMessage に作成するパーティションごとに、そのパーティションが Campaign スキーマ内で使用する eMessage システム・テーブルを作成してデータを追加し、構成する必要があります。

パーティションの eMessage システム・テーブルを準備するには、以下のタスクを行います。

1. 『パーティション・スキーマ内の eMessage テーブルの作成とデータの追加』
2. 65 ページの『パーティションのシステム・テーブルへの自動アクセスの構成』
3. 66 ページの『パーティションのシステム・テーブル特性の指定』。

パーティション・スキーマ内の eMessage テーブルの作成とデータの追加

パーティションの eMessage システム・テーブルを作成してデータを追加するには、Campaign パーティションがあるデータベースに対して SQL スクリプトを実行します。

SQL スクリプトについて詳しくは、28 ページの『手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)』の参照表でスクリプト名および場所を確認してください。

1. eMessage システム・テーブルを作成します。

データベース・クライアントで、システム・テーブルを作成する SQL スクリプトを Campaign データベースに対して実行します。

2. 作成したテーブルにデータを追加します。

データベース・クライアントを使用して、テーブルにデータを追加するスクリプトを Campaign データベースに対して実行します。

手動での eMessage システム・テーブルの作成とデータの追加 (必要な場合)

eMessage を使用するためには、Campaign スキーマに追加のシステム・テーブルを作成し、これらのテーブルに初期データを設定する必要があります。これらのテーブルを使用するのは、eMessage のみです。

システム・テーブルを自動的に作成するオプションを選択すると、Campaign インストーラーは、Campaign スキーマで eMessage システム・テーブルを自動的に作成し、データを追加します。ただし、このオプションを選択しない場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加する必要があります。

データベース・クライアントを使用して、Campaign データベースに対して適切なスクリプトを実行します。ご使用のインストール済み環境に適切なスクリプトを判別するには、以下の表を参照してください。実行する必要のあるスクリプトは、Campaign スキーマをホストするデータベースのタイプ、および Campaign テーブルが Unicode 用に構成されているかどうかによって異なります。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

eMessage テーブルを作成するスクリプト

IBM では、ローカル環境に eMessage テーブルを作成する ace_op_systab スクリプトを提供しています。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、eMessage インストール済み環境の dd1/unicode ディレクトリーにある適切なスクリプトを見つけます。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されていない場合は、eMessage インストール済み環境の dd1 ディレクトリーにある非 Unicode 用のスクリプトを使用します。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_systab_db2.sql システム・テーブルが置かれるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 32K 以上のページ・サイズが必要です。
Microsoft SQL Server	ace_op_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_systab_ora.sql

eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

IBM では、ローカル環境で eMessage テーブルにデータを追加する ace_op_populate_systab スクリプトを提供しています。

スクリプトの場所

eMessage インストール済み環境の dd1 ディレクトリーにあるデータ追加用のスクリプトを見つめます。IBM で用意しているデータ追加用スクリプトのバージョンは 1 つだけです。これらのスクリプトは、Unicode テーブルまたは非 Unicode テーブルのいずれにも使用できます。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_populate_systab_db2.sql
Microsoft SQL Server	ace_op_populate_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_populate_systab_ora.sql

パーティションのシステム・テーブルへの自動アクセスの構成

eMessage は、Marketing Platform で構成されたシステム・ユーザーを使用して、パーティションのシステム・テーブルにアクセスします。このシステム・ユーザーに追加された Marketing Platform データ・ソースが、必要なアクセス資格情報を提供します。eMessage システム・テーブルはパーティションの Campaign スキーマ内に存在するため、Campaign スキーマにアクセスするために作成したシステム・ユーザーを使用して、パーティションの eMessage システム・テーブルにアクセスすることができます。

eMessage 構成で、パーティションに以下の構成プロパティーを設定し、パーティションの Campaign システム・ユーザーに対して構成したユーザー名およびプラットフォーム・データ・ソースを指定します。

- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > asmUserForDBCredentials

- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > amDataSourceForDBCredentials

パーティションのシステム・テーブル特性の指定

eMessage には、パーティションのシステム・テーブルについて説明する情報が必要です。この情報を提供するには、パーティションの構成プロパティーで以下のプロパティーを更新します。

- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > type
- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > schemaName
- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcBatchSize
- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcClassName
- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcURI

構成プロパティーの設定について詳しく学ぶには、各プロパティーの Marketing Platform オンライン・ヘルプを参照してください。

これらの構成プロパティーおよび eMessage の構成についての追加情報は、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

ステップ: IBM EMM Hosted Services へのパーティション・アクセスを構成する

パーティション内の IBM eMessage コンポーネントは、IBM EMM Hosted Services との通信を試みる際に、有効なログイン資格情報を自動的に提供できるようになっていなければなりません。そのためには、Marketing Platform ユーザーに IBM EMM Hosted Services ログイン資格情報を追加する必要があります。このユーザーは、eMessage システム・ユーザーになります。

IBM EMM Hosted Services 資格情報を格納するプラットフォーム・データ・ソースを、eMessage システム・ユーザーに追加できます。このユーザーは、パーティション内の Campaign システム・テーブルにアクセスするシステム・ユーザーと同じであっても構いません。

パーティションのシステム・ユーザーを構成するためのステップは、eMessage の初期インストール時に、最初のパーティションを作成するために従ったステップと同じです。IBM EMM Hosted Services ログイン資格情報をシステム・ユーザーに追加する方法について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

IBM EMM Hosted Services にアクセスするために必要な資格情報は、最初の起動プロセスで IBM から提供されるユーザー名とパスワードです。

重要: 追加するパーティションごとに、個別のユーザー名およびパスワードを IBM に要求する必要があります。

IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザー

IBM eMessage コンポーネントは、ログイン資格情報の手動入力を必要とせずに、IBM EMM Hosted Services と通信できなければなりません。自動ログインを確立するには、IBM Marketing Platform に、必要なアクセス資格情報を提供できるシステム・ユーザーを定義します。

ユーザー管理およびトラブルシューティングを単純にするために、既存のシステム・ユーザーがホスト・サービスおよびローカル・システム・テーブルにアクセスするように変更することができます。複数のシステムに資格情報を提供する単一のシステム・ユーザーを構成できます。例えば、Campaign システム・ユーザーの構成を変更することで、IBM EMM Hosted Services および Campaign スキーマの eMessage システム・テーブルに自動的にアクセスできる単一のユーザーを作成します。

IBM EMM Hosted Services にアクセスするために必要な資格情報は、起動プロセスで IBM から提供されるユーザー名とパスワードです。使用する資格情報は、IBM の米国のデータ・センターに接続するか、IBM が英国で保守しているデータ・センターに接続するかによって異なります。どちらのデータ・センターを使用するかを決定するには、IBM にご相談ください。

IBM EMM Hosted Services と通信するシステム・ユーザーの構成方法に関する具体的な情報については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

システム・ユーザーおよびデータ・ソースの作成方法に関する一般情報については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

ステップ: 新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする

新規パーティションのユーザーが Campaign で eMessage 機能にアクセスできるようにするには、新規パーティションに対応する Campaign パーティションで eMessage を使用可能にする必要があります。例えば、eMessage メール配信タブは、Campaign 構成で eMessage を使用可能にするまでは、Campaign インターフェースに表示されません。

パーティションで eMessage を使用可能にするには、Campaign パーティションに対応する eMessageInstalled 構成プロパティを更新します。

Marketing Platform 構成で、「**Campaign | partitions | partition[n] | server | internal**」にナビゲートして、eMessageInstalled プロパティを **yes** に設定します。

ステップ: パーティションの RLU の場所を指定する

eMessage を使用可能にするパーティションごとに、受信者リスト・アップローダー (RLU) の場所を指定する必要があります。

初期インストール時に、IBM インストーラーは自動的に RLU の場所をデフォルト・パーティション (partition1) の構成に追加します。ただし、新しいパーティションを環境に追加するときには、新しいパーティションのすべてが正しい場所を参照するように手動で構成する必要があります。eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべてのパーティションは、Campaign Web アプリケーションをホストするマシンのローカル・ファイル・システムに置かれた同じプラグイン・ファイルにアクセスします。

1. Campaign インストール済み環境の **partition1** の構成で、
「Campaign」>「partitions」>「partition1」>「eMessage」>
「eMessagePluginJarFile」 にナビゲートします。

このプロパティの値は、RLU として機能するプラグイン・ファイル (emessageplugin.jar) の絶対パスです。

例: C:\IBM\Unica\emessage\plugin\emessageplugin.jar

2. eMessagePluginJarFile プロパティの値をコピーします。
3. 新しいパーティションの eMessagePluginJarFile にナビゲートし、**partition1** からコピーしたパスを入力します。

すべてのパーティションは、RLU に対して同じ場所を使用する必要があります。

ステップ: システム・コンポーネントを再始動する

eMessage および Campaign の構成を変更したら、Campaign Web アプリケーション・サーバー、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT)、および Campaign リスナーを再始動する必要があります。

1. Campaign の Web アプリケーション・サーバーを再始動します。

手順については、ご使用の Web アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

サーバーが始動したことを検査するには、IBM EMM インストール済み環境にログインし、Campaign にアクセスして、既存のメールを開けることを確認します。

2. レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動します。

RCT を手動で再始動するには、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにある rct スクリプトを実行します (rct start コマンド)。

RCT がサービスとして実行されるように構成されている場合は、RCT サービスを再始動します。RCT をサービスとして初めて再始動するときは、後で RCT を手動で再始動する必要があります。

詳しくは、105 ページの『RCT スクリプト』を参照してください。

3. Campaign リスナーを次のようにして再始動します。
 - Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の bin ディレクトリーにある cmpServer.bat ファイルを実行します。
 - UNIX の場合は、./rc.unica_ac start コマンドを root として実行します。

ステップ: パーティションの構成および接続をテストする

重要: Campaign または eMessage の構成を変更した場合は、作業を開始する前に、Campaign をホストする Web アプリケーション・サーバーを再始動したことと、レスポンスおよびコンタクトのトラッカーを再始動したことを確認してください。

eMessage には、パーティションの構成と、その IBM EMM Hosted Services への接続を検証するために使用できるスクリプトが用意されています。IBM は、パーティションからのメール配信インターフェースへのアクセスを確認することもお勧めします。

パーティションのテスト方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの構成

複数のパーティションがある Campaign、eMessage、または Interact を使用する場合は、パーティションごとに IBM Cognos レポート・パッケージを構成する必要があります。手順については、「*IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド*」を参照してください。

第 9 章 Campaign のアップグレード

Campaign のアップグレード手順は、どのバージョンがインストールされているか、および eMessage を使用するかどうかによって異なります。以下のトピックから、該当する一連の手順に従ってください。

注: Campaign 9.0 (eMessage が含まれる) へのアップグレードは、バージョン 8.5.x.x または 8.6.x.x からのみ行えます。

注: Campaign をアップグレードする前に、Marketing Platform をアップグレードする必要があります。

目的の情報	参照トピック
IBM EMM 製品をアップグレードする前に知る必要があるすべてのこと。	『すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件』
eMessage をアップグレードする前に知る必要があるすべてのこと。	75 ページの『eMessage のアップグレードに固有の準備』
以前のバージョンの Campaign および eMessage からアップグレードする方法を説明しているクイック・リファレンス。	73 ページの『IBM Campaign アップグレード・シナリオ』
Campaign (eMessage を含む) をアップグレードするためのステップをすべて示しているクイック・リファレンス。	77 ページの『Campaign 8.5 または 8.6 からのアップグレードのステップ』
アップグレードをサイレント・モードで実行する方法に関する情報。	18 ページの『無人モードを使用して複数回インストールする』

アップグレードは、次の 2 つの基本ステップから成ります。まず、インストーラーをアップグレード・モードで実行して、必要なシステム・ファイルを確認します。次に、アップグレード・ツール (acUpgradeTool) を実行して、既存のユーザー・データを新しいバージョンの Campaign と連動するようにアップグレードします。

すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件

任意の IBM EMM 製品をアップグレードするには、『インストールの準備』という章の 4 ページの『前提条件』にリストされているすべての前提条件を満たしていなければなりません。

加えて、このセクションにリストされている前提条件も満たす必要があります。

以前のインストールによって生成された応答ファイルの削除

インストーラーを実行して 8.6.0 より前のバージョンからアップグレードする前に、以前のインストールで生成された応答ファイルすべてを削除しなければなりません。

古い応答ファイルは 8.6.0 以降のインストーラーとは互換性がありません。インストーラーの動作と応答ファイルの形式に変更が加えられたためです。

古い応答ファイルを削除しないと、インストーラーを実行する際にインストーラー・フィールドに間違えたデータが事前に取り込まれてしまったり、インストーラーによって一部のファイルがインストールできなかつたり、構成ステップがスキップされてしまったりする可能性があります。

応答ファイルの名前は `installer_<product><version>.properties` ですが、`installer.properties` という名前の IBM インストーラー自体のファイルは除きます。インストーラーは、これらのファイルを、インストール時にユーザーによって指定されたディレクトリーに作成します。デフォルトの場所は、ユーザーのホーム・ディレクトリーです。

ユーザー・アカウント要件 (UNIX のみ)

UNIX の場合は、製品をインストールしたのと同じユーザー・アカウントでアップグレードを実行しなければなりません。

32 ビットから 64 ビットへのバージョンアップ

IBM EMM 製品を 32 ビット・バージョンから 64 ビット・バージョンに移行する場合、以下の条件を満たしていることを確認してください。

- 製品データ・ソースのデータベース・クライアント・ライブラリーも 64 ビットであること
- すべての関連ライブラリー・パス (例えば、開始スクリプトや環境スクリプト) が 64 ビット・バージョンのデータベース・ドライバーを正しく参照していること

知識要件

これらの説明では、アップグレード実行者が以下の領域を理解していることを前提としています。

- 16 ページの『IBM EMM インストーラーの機能』で説明されている IBM インストーラーの基本機能
- 全般的な IBM EMM 製品機能とコンポーネント (ファイル・システムの構造も含みます)
- ソース製品バージョンと新規バージョンのインストール・プロセスと構成プロセス
- ソース・システムとターゲット・システムの構成プロパティーの保守
- レポートのインストール・プロセスと構成プロセス (レポートを使用している場合)

アップグレードの順序

アップグレードを行う際には、1 つの例外を除いて、6 ページの『Marketing Platform の要件』で説明されているものと同じ考慮事項が適用されます。

Interact 8.x ランタイムは、Interact 7.x 配置を実行することができます。したがって、設計環境より前にランタイム環境をアップグレードする必要があります。

Marketing Platform は他の IBM EMM 製品のアップグレードより前かそれと同時に正常にアップグレードする必要があることも認識しておいてください。 Marketing Platform を互換性のあるリリースにアップグレードしないと、IBM EMM 製品をアップグレードすることができません。

重要: アップグレード元としてサポートされていない既存のバージョンに製品をインストールしようとする、インストールをキャンセルするか、新規のインストールを続行するかを尋ねるメッセージが表示されます。

IBM Campaign アップグレード・シナリオ

Campaign 9.0 へのアップグレードは、バージョン 8.5.x.x または 8.6.x.x からのみ行えます。それより前のバージョンの Campaign を使用している場合は、次の表に示すアップグレード・パスに従う必要があります。

重要: eMessage は Campaign の一部としてインストールまたはアップグレードされます。eMessage を現在使用している場合、または使用することを計画している場合は、75 ページの『既存の eMessage インストール済み環境のアップグレード』を必ず参照してください。

要確認: Campaign をアップグレードする前に、Marketing Platform をアップグレードする必要があります。

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
5.1+ または 6.x のいずれかのバージョン	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新しい場所に Campaign v8.6 の新規インストールを行います。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 2. v8.6 に付属のデータ・マイグレーション・スクリプトを実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign データ・マイグレーション・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 3. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の手順に従います。 	

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
7.0.x から 7.3.x までのいずれかのバージョン	<ol style="list-style-type: none"> 1. ソース・バージョン上に Campaign v8.6 のインプレース・インストールを行います (eMessage 7.x を同時に使用していない場合)。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 2. 8.6 アップグレード・ツール (/tools/migration/5.1+To8.6/acUpgradeTool) を実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 3. これらのバージョンの Campaign でのレポートは、Affinium Reports (バージョン 7.0.x から 7.2.x) によって提供されていました。Affinium Reports 7.2.1 から v8.6 のレポートへのアップグレード・パスはありません。したがって、これらのバージョンからのアップグレード後に、「<i>IBM Marketing Platform インストール・ガイド v8.6</i>」の説明に従って、新規レポートを構成する必要があります。 4. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の手順に従います。 	<p>eMessage 7.x を Campaign 7.x と共に使用している場合は、インプレース・アップグレードを行わない ください。 eMessage 7.x を保持し、Campaign v8.6 を異なる場所に新規インストールする必要があります。</p> <p>「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」に記載されている eMessage アップグレードの手順に注意深く従ってください。</p> <p>重要: eMessage 7.x インストール済み環境を新たな eMessage インストール済み環境に移行するための戦略を、IBM と協力して立てることを強くお勧めします。</p>
7.5.x から 8.2.x までのいずれかのバージョン	<ol style="list-style-type: none"> 1. ソース・バージョン上に Campaign v8.6 のインプレース・インストールを行います (eMessage 7.x を同時に使用していない場合)。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 2. 8.6 アップグレード・ツール (/tools/migration/5.1+To8.6/acUpgradeTool) を実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 3. 「<i>IBM Marketing Platform インストール・ガイド v8.6</i>」の説明に従って、レポートをアップグレードします。 4. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の手順に従います。 	<p>eMessage 7.x を Campaign 7.x と共に使用している場合は、インプレース・アップグレードを行わない ください。 eMessage 7.x を保持し、Campaign v8.6 を異なる場所に新規インストールする必要があります。</p> <p>「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」に記載されている eMessage アップグレードの手順に注意深く従ってください。</p> <p>重要: eMessage 7.x インストール済み環境を新たな eMessage インストール済み環境に移行するための戦略を、IBM と協力して立てることを強くお勧めします。</p>

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン	<ol style="list-style-type: none"> 1. 8.5 または 8.6 バージョン上に Campaign v9.0 のインプレース・インストールを行います。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.0</i>」に記載されている手順に従ってください。 2. 9.0 アップグレード・ツール (/tools/upgrade/8.5+To9.0/acUpgradeTool) を実行します。「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.0</i>」に記載されている手順に従ってください。 3. 「<i>IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド v9.0</i>」の説明に従って、レポートをアップグレードします。 	eMessage をアップグレードするときに、「 自動 DB セットアップ 」を選択する必要はありません。このオプションは、eMessage システム・テーブルが存在しない場合の新規インストールのためのものです。

注: アップグレードが完了したら、ブラウザ・キャッシュをクリアする必要があります。また、Campaign アプリケーションを更新する Campaign フィックスパックまたは Campaign 暫定修正を適用した場合も、ブラウザ・キャッシュをクリアする必要があります。

eMessage のアップグレードに固有の準備

eMessage のアップグレードを計画するときは、eMessage との連動および IBM が提供するホストされた E メール環境との連動に固有の事柄を考慮してください。

アップグレードする前に、オペレーティング・システム、ハードウェアとソフトウェア、およびネットワーク・リソースとデータベース・リソースが、eMessage の現行バージョンを含め、インストールされているすべての IBM EMM アプリケーションの現行の要件を満たすことを確認します。現行の具体的な要件については、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料を参照してください。eMessage の要件は別のセクションに記載されており、現行バージョンの Campaign の要件とは異なる場合があります。

アップグレードの計画には、以下の考慮事項を含めてください。

- 『既存の eMessage インストール済み環境のアップグレード』
- 76 ページの『eMessage アップグレードのスケジューリング』
- 77 ページの『全受信者リストのアップロードの完了』
- 77 ページの『アップグレード中のアウトバウンド E メール配信について』
- 77 ページの『アップグレード中の E メール・レスポンスについて』

既存の eMessage インストール済み環境のアップグレード

最新バージョンの eMessage にアップグレードするには、Campaign を同じバージョン・レベルにアップグレードする必要があります。

Campaign 9.0 (eMessage を含む) へのアップグレードは、バージョン 8.5 または 8.6 からのみ行えます。

eMessage を現在使用している場合は、以下のようなアップグレードする際の重要な考慮事項があります。

- 従う必要があるアップグレード・パスは、使用している eMessage のバージョンによって決まります。例えば、eMessage 7.x を使用している場合は、インプレース・アップグレードを行ってはいけません。73 ページの『IBM Campaign アップグレード・シナリオ』に記載されている手順に注意深く従ってください。
- 最新バージョンの Campaign および eMessage へのアップグレードは、ホストされた E メール・アカウントの設定に影響を与えません。アップグレードを完了したら、メール配信を再開できます。
- アップグレードの一部として eMessage システム・テーブルの変更がある場合は、必要なスキーマ・アップグレード・スクリプトおよびプロシージャが IBM から提供されます。

これまでに eMessage をまったく使用していなくても、eMessage の必要ファイルがアップグレードによってインストールされますが、eMessage が使用可能になるわけではありません。アップグレード・インストーラーを実行した後、eMessage に関連する配置前の構成ステップ (27 ページの『第 4 章 配置前の IBM Campaign の構成』に記載) を完了する必要があります。

eMessage を使用して E メールを送信するには、IBM に連絡してホストされた E メール・サブスクリプションを購入する必要があります。E メール・サブスクリプションを購入した後の eMessage の構成方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

eMessage アップグレードのスケジューリング

eMessage をアップグレードするためには、システム・コンポーネントを停止し、インターフェースをオフラインにする必要があります。また、アップグレードは IBM EMM Hosted Services との間のデータのアップロードおよびダウンロードに支障をきたします。問題を回避するために、システム上の要求が最小になる時間帯に合わせてアップグレードをスケジュールしてください。以下に例を示します。

- マーケティング・ユーザーが受信者リストおよび受信者データを更新しなければならない時間帯には、アップグレードを避けます。
- 標準メール配信または綿密なモニターを必要とするメール配信をマーケティング・ユーザーが実行する必要がある時間帯には、アップグレードを避けます。
- スケジュールされたメール配信が実行されるように構成されている時間帯には、eMessage インストール済み環境をアップグレードしないでください。
- IBM Marketing Platform のアップグレード直後に行われるようにアップグレードをスケジュールしてください。
- いつアップグレードを開始する予定であるかを、時間に余裕を持って全ユーザーに事前通知してください。

全受信者リストのアップロードの完了

eMessage プロセスが含まれる Campaign フローチャートを実行すると、Campaign が自動的に受信者リスト・データを (出力リスト・テーブル (OLT) として) IBM EMM Hosted Services にアップロードします。ただし、OLT のアップロードが、アップグレード・アクティビティによって妨げられる可能性があります。

OLT のアップロード問題を回避するために、IBM では、受信者リスト・データをアップロードする必要がない時間帯にアップグレードをスケジュールすることを推奨しています。eMessage のアップグレードを開始する前に、eMessage プロセスが含まれる Campaign フローチャートのすべてが実行を完了していることを確認してください。

進行中の受信者リスト構成作業を維持するには、アップグレードを開始する前に作業内容を保存し、すべてのローカル・ファイルおよびデータベースをバックアップします。(メール配信構成は IBM EMM Hosted Services に保存されるため、アップグレードによる影響を受けません。) 必要なローカル・バックアップの実行について詳しくは、79 ページの『Campaign のバックアップ』を参照してください。

アップグレード中のアウトバウンド E メール配信について

アップグレード中は、eMessage メール配信インターフェースが使用不可になります。新しいメール配信を構成または開始することはできません。既に開始したメール配信は実行されますが、これらのメール配信をモニター、一時停止、または停止することはできません。

アップグレード中の E メール・レスポンスについて

eMessage をアップグレードするには、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を一時的に停止する必要があります。

アップグレード中に、メール・レスポンス・データの可用性に多少の遅延が生じる場合があります。この情報は失われません。IBM EMM Hosted Services は、RCT が停止されている間、レスポンスおよびコンタクト・データをキューに入れます。RCT を再始動すると、RCT は累積されたすべての情報をダウンロードします。

アップグレードの間、前のメール配信中に E メールを受信した個人には、その E メールに含まれているリンクの可用性、リンクのクリックに対するレスポンス速度、または Web サイトの要求に、アップグレード・アクティビティによる変化は感じられません。これらの機能は、IBM が IBM EMM Hosted Services で保守されるリソースを使用してサポートします。

Campaign 8.5 または 8.6 からのアップグレードのステップ

Campaign 8.5.x または 8.6.x からのアップグレードは、インプレース・アップグレードとなります。新しいバージョンを必ず現行インストール済み環境と同じディレクトリーにインストールしてください。こうすると、Campaign は新しいバージョンにアップグレードすることを検出します。

Campaign のアップグレードは、まずインストーラーをアップグレード・モードで実行する、次に acUpgradeTool を実行するという、大きくは 2 つのステップから成ります。次の表は、全体手順を示しています。

要確認: Campaign をアップグレードするためには、その前に Marketing Platform をアップグレードする必要があります。

ステップ	説明	参照
1	前提条件: Campaign および eMessage のバージョンがどれであっても、サポートされるアップグレード・パスと前提条件を理解します。	71 ページの『第 9 章 Campaign のアップグレード』
2	構成設定をエクスポートします。	『構成設定のエクスポート (オプション)』
3	Campaign をバックアップします。	79 ページの『Campaign のバックアップ』
4	eMessage の場合のみ。	79 ページの『レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの停止』
5	Campaign リスナーおよびユーティリティーを停止し、Campaign を配置解除します。	80 ページの『Campaign の配置解除』
6	AIX の場合のみ。	80 ページの『メモリーからの未使用ファイルのアンロード (AIX のみ)』
7	インストーラーをアップグレード・モードで実行します。	81 ページの『アップグレード・モードでの Campaign インストーラーの実行』
8	Web アプリケーション・サーバーに Campaign を再配置した後、Campaign リスナーを再始動します。	81 ページの『Web アプリケーション・サーバーへの Campaign の再配置』
9	eMessage の場合のみ: レスポンスおよびコンタクトのトラッカーを再始動します。	81 ページの『レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの再始動』
10	SQL アップグレード・スクリプトを検討して、必要な場合は変更します (acUpgradeTool のため)。	82 ページの『SQL アップグレード・スクリプトの確認と、必要に応じた変更』
11	アップグレード・ツール (acUpgradeTool) の環境変数を設定します。	83 ページの『Campaign 9.x の環境変数の設定』
12	アップグレード・ツール (acUpgradeTool) を実行するために必要な情報を収集します。	85 ページの『アップグレード・ツールを実行するために必要な情報の収集』
13	Campaign 9.x アップグレード・ツール (acUpgradeTool) を実行します。	86 ページの『Campaign 9.x アップグレード・ツールの実行』

構成設定のエクスポート (オプション)

新しい Campaign インストール済み環境に、前の Campaign インストール済み環境のいずれかの構成設定が必要な場合は、アップグレードの前に、IBM configTool ユーティリティーを実行して Campaign 構成パラメーターをエクスポートします。

configTool ユーティリティが作成する exported.xml ファイルの固有のファイル名と場所を指定し、アップグレード・プロセス後にそのファイルを見つけられるように、メモに記録します。

configTool ユーティリティの構文、コマンド、およびオプションについては、91 ページの『configTool ユーティリティ』を参照してください。

Campaign のバックアップ

Campaign のアップグレード・インストールを開始する前に、必ず以下の情報をバックアップしてください。

1. Campaign インストール・ディレクトリーと、(インストールされている場合) eMessage インストール・ディレクトリーをバックアップします。

Campaign のアップグレード・プロセスでは、Campaign と eMessage の両方を実行するために必要なファイルがすべてインストールされます。さらに、既存の eMessage インストール済み環境がある場合は、そのインストール済み環境も Campaign と一緒にアップグレードされます。

IBM インストーラーは、アップグレード・プロセス中にインストール済みファイルのバックアップを自動的に行うためのオプションも提示することに注意してください。その時点でバックアップ・ステップを手動で行うか、インストール中に自動的に行うか、あるいはその両方を行うことができます。

2. 既存の Campaign インストール済み環境および eMessage (インストールされている場合) が使用するシステム・テーブル・データベースをバックアップします。

データのバックアップを作成する手順については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

これらのバックアップ・ステップを完了すると、アップグレード・プロセス中に問題が発生した場合に、既知の作動状態に復元する手段が用意されることとなります。

レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの停止

現在 eMessage を使用している場合に限り必要です。

IBM eMessage を使用している場合、アップグレードを開始する前に、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を停止する必要があります。RCT をサービスとして登録した場合は、そのサービスを停止する必要があります。

注: アップグレード完了後に RCT を再始動する必要があります。RCT または RCT サービスは、アップグレード後に自動的に再始動しません。

手動による RCT の停止

rct スクリプトを実行して、RCT を停止します。このスクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。このスクリプトを以下のよう実行します。

```
rct stop
```

このスクリプトについて詳しくは、105 ページの『RCT スクリプト』を参照してください。

サービスとして登録された RCT の停止

サービスとしての RCT を削除すると、アップグレード中にオペレーティング・システムを再始動するときに、RCT が自動的に再始動しなくなります。

サービスの管理用にオペレーティング・システムに用意されているコマンドを使用して、RCT サービスを停止してください。

Campaign の配置解除

アップグレードする前に、以下の手順に従って、Campaign プロセスを停止し、アップグレードするシステム上の Campaign.war ファイルの既存のロックをすべて解除します。ロックを解除する必要があるのは、アップグレードによって新しいバージョンの Campaign が Marketing Platform に登録されるようにするためです。

Campaign を配置解除するには、以下のようになります。

1. 次のいずれかの方式を使用して、Campaign リスナーを停止します。

- UNIX の場合は、次のコマンドを root として実行します。

```
./rc.unica_ac stop
```

- Windows の場合は、Campaign bin ディレクトリーに移動して、次のコマンドを実行します。

```
svrstop -p 4664
```

CAMPAIGN_HOME 環境変数の指定を求められたら、次に示すとおりを設定した後、svrstop コマンドを再度実行します。

```
set CAMPAIGN_HOME=C:%<installation_path>%Campaign
```

また、実行されている可能性のある Campaign ユーティリティー (unica_*) をすべて停止します。手順については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

このステップをスキップした場合、インストーラーは実行中のプロセスがあるかどうかを検出して、それらを停止することを要求します。

2. Web アプリケーション・サーバーの指示に従って、Campaign.war ファイルを配置解除し、すべての変更を保存するかアクティブにします。
3. Web アプリケーション・サーバーをシャットダウンしてから再始動することで、Campaign.war ファイルのロックを解除します。

メモリーからの未使用ファイルのアンロード (AIX のみ)

AIX にインストールする場合、インストーラーをアップグレード・モードで実行する前に、AIX インストールに組み込まれている slibclean コマンドを実行して、メモリーから未使用のライブラリーをアンロードします。この目的のためには、root として slibclean コマンドを実行しなければならないことに注意してください。

アップグレード・モードでの Campaign インストーラーの実行

アップグレード・プロセスの一部として、Campaign インストーラーをアップグレード・モードで実行する必要があります。

注: Campaign のアップグレードは、まずインストーラーをアップグレード・モードで実行する、次に acUpgradeTool を実行するという、大きくは 2 つのステップから成ります。詳しくは、77 ページの『Campaign 8.5 または 8.6 からのアップグレードのステップ』を参照してください。

インストーラーをアップグレード・モードで実行する場合は、以下のガイドラインに従ってください。

- **IBM_EMM_Installer** インストーラーがアップグレード・モードで実行されるようにするには、インストーラーを実行するときに現行インストール済み環境と同じディレクトリーを選択します。インストーラーは、Campaign の既存のバージョンを検出し、アップグレードを確認するよう求めるプロンプトを出します。

インストーラーを GUI モード、コンソール・モード、または不在モードで実行する手順については、23 ページの『手順: IBM EMM インストーラーを実行する』を参照してください。

- v9.0 にアップグレードする場合は、インストーラー・オプションの「**自動 DB セットアップ**」を選択する必要はありません。このオプションは新規インストールのためのものであり、アップグレードは対象としていません。
- 他の IBM 製品がインストールされているシステムでインストーラーを再実行する場合、それらの他の製品を再インストールしないでください。
- 応答ファイルが既に作成済みで不在モードで実行する場合、インストーラーは以前に設定されたインストール・ディレクトリーを使用します。応答ファイルがないときに不在モードを使用してアップグレードする場合は、初回のインストール時にインストーラーを手動で実行して応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで現行のインストール・ディレクトリーを必ず選択してください。
- アップグレード後に EAR ファイルを作成する場合は、25 ページの『インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成する方法』を参照してください。

Web アプリケーション・サーバーへの Campaign の再配置

新しくインストールしたバージョンの Campaign を Web アプリケーション・サーバーに再配置します。完了したら、Campaign リスナー (サーバーとも呼ばれる) を必ず再始動してください。手順については、35 ページの『第 5 章 IBM Campaign Web アプリケーションの配置』を参照してください。

レスポンスおよびコンタクトのトラッカーの再始動

eMessage を使用する場合は、アップグレード後にレスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動する必要があります。

手動による RCT の再始動

RCT を手動で再始動するには、`rct start` コマンドを使用します。RCT スクリプトは、eMessage インストール済み環境の `bin` ディレクトリーにあります。詳しくは、105 ページの『RCT スクリプト』を参照してください。

サービスとしての RCT の再始動

RCT がインストールされているマシンのオペレーティング・システムを再始動するたびに RCT を再始動するには、RCT をサービスとして追加します。手順については、106 ページの『MKService_rct スクリプト』を参照してください。

注: RCT をサービスとして再始動する場合、1 回目は手動で RCT を再始動する必要があります。

SQL アップグレード・スクリプトの確認と、必要に応じた変更

Campaign アップグレード・ツール (acUpgradeTool) を実行する前に、データベース用に提供された SQL アップグレード・スクリプトを変更する必要があるかどうかを判断します。

Campaign システム・テーブルをカスタマイズした結果として、Campaign に付属のデフォルトのデータ定義言語 (DDL) スクリプトの変更が生じた場合は、SQL スクリプトを変更する必要があります。例として、カスタム・オーディエンス・レベルを定義した場合やフィールド名を変更した場合が挙げられます。

このような場合は、データベースがカスタマイズに対応するように、提供された SQL アップグレード・スクリプトを変更する必要があります。

SQL アップグレード・スクリプトは /tools/upgrade/8.5+To9.0 ディレクトリーにインストールされます。データベース・タイプに応じた適切なスクリプトを使用してください。

- ac_upgrade_db2.sql: DB2 アップグレード・スクリプト (非 Unicode)
- ac_upgrade_db2_unicode.sql: DB2 アップグレード・スクリプト (Unicode)
- ac_upgrade_oracle.sql: Oracle アップグレード・スクリプト (非 Unicode)
- ac_upgrade_oracle_unicode.sql: Oracle アップグレード・スクリプト (Unicode)
- ac_upgrade_sqlsvr.sql: MS SQL Server アップグレード・スクリプト (非 Unicode)
- ac_upgrade_sqlsvr_unicode.sql: MS SQL Server アップグレード・スクリプト (Unicode)

SQL アップグレード・スクリプトに対する変更の例

以下の 2 つの例で、それぞれのシナリオで SQL アップグレード・スクリプトに対して行う必要がある変更を説明します。

例 1: オーディエンス・レベルに関連付けられたフィールド名の変更

既存の Campaign 環境で、UA_ContactHistory テーブルの CustomerID フィールドが ID に変更されています。

このフィールド名の変更に対応するには、アップグレード・スクリプト内のすべての CustomerID の出現箇所を ID に変更する必要があります。

例 2: 追加オーディエンス・レベル

既存の Campaign 環境に、Household という名前の追加オーディエンス・レベルが含まれています。このオーディエンス・レベルをサポートするために、データベースに HH_ContactHistory、HH_ResponseHistory および HH_DtlContactHist という名前のテーブルがあります。1次キーは HouseholdID です。

Household オーディエンス・レベルを新しい Campaign インストール済み環境でサポートするには、Customer オーディエンス・レベルのレスポンス履歴および処理サイズを更新する SQL アップグレード・スクリプト内のコードを見つけ、Household オーディエンス・レベルに複製します。これらのステートメント内のテーブル名を、Household オーディエンス・レベルで適切な名前に変更し、CustomerID へのすべての参照を HouseholdID に変更します。

以下のサンプル SQL ステートメントは、Household オーディエンス・レベルが含まれる、SQL Server データベースの ac_upgrade_sqlsvr.sql スクリプトで必要な追加を示しています。Household オーディエンス・レベルをサポートするように変更されているテキストは太字で示されています。

```
-- ResponseHistory update "template"
ALTER TABLE HH_ResponseHistory ADD DirectResponse int NULL
go

-- Update the treatment sizes

update ua_treatment
set treatmentsize=(select count(DISTINCT HouseholdID)
from HH_ContactHistory
where HH_ContactHistory.CellID = ua_treatment.CellID
AND HH_ContactHistory.PackageID = ua_treatment.PackageID
and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 0)

where exists

(select * from hh_contacthistory
where hh_contacthistory.CellID = ua_treatment.CellID
AND hh_contacthistory.PackageID = ua_treatment.PackageID
and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 0)
go

update ua_treatment
set treatmentsize=(select count(DISTINCT HouseholdID)
from HH_DtlContactHist
where HH_DtlContactHist.TreatmentInstID = ua_treatment.TreatmentInstID
and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 1)

where exists

(select * from hh_dtlcontacthist
where hh_dtlcontacthist.TreatmentInstID = ua_treatment.TreatmentInstID
and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 1)
go
```

データベース表およびオーディエンス・レベルの管理について詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

Campaign 9.x の環境変数の設定

acUpgradeTool を実行する前に、setenv ファイルを編集して、アップグレード・ツールが必要とする環境変数を設定します。

1. `setenv` ファイルをテキスト・エディターで開きます。

このファイル (UNIX の場合の名前は `setenv.sh`、Windows の場合は `setenv.bat`) は、9.0 アップグレード・ツール (`/tools/upgrade/8.5+To9.0`) をインストールしたパスにあります。

2. `setenv` ファイル内の説明に従って、インストールに関連する値を入力します。

必要な変数を次の表に示します。

変数	説明
<code>JAVA_HOME</code>	<p>必須。</p> <p>Campaign インストールによって使用される JDK のルート・ディレクトリー。</p> <p>WebLogic の場合は、JDK1.6 の <code>JAVA_HOME</code> パスを指定する必要があります。JDK1.6 以外の <code>JAVA_HOME</code> を指定すると、アップグレード・ツール・ユーティリティーは失敗します。</p>
<code>JDBC_DRIVER_CLASSPATH</code>	<p>必須。</p> <p>.jar ファイルを含む JDBC ドライバーの絶対パス。</p> <p>WebLogic の場合も WebSphere の場合も、パスに .jar ファイルを含める必要があります。</p>
<code>IS_WEBLOGIC_SSL</code> <code>BEA_HOME_PATH</code> <code>SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH</code>	<p>SSL を使用し、かつターゲット・システム・テーブルへの接続が WebLogic サーバー経由である場合は必須。</p> <p><code>IS_WEBLOGIC_SSL=YES</code> を設定して、<code>BEA_HOME_PATH</code> と <code>SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH</code> を設定します。詳しくは、<code>setenv</code> ファイルを参照してください。</p>
その他の変数	<p>設定可能なオプション変数が多数あります。以下に例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Unicode スクリプトを実行するには、<code>IS_UNICODE_SCRIPT = Y</code> を設定します。 • アップグレード・ツール実行中のメモリー・エラーを回避するには、より大きい Java ヒープ・メモリー・サイズを <code>JAVA_OPTIONS</code> 環境変数で指定します。 <p>説明は、<code>setenv</code> ファイルを参照してください。</p>

アップグレード・ツールを実行するために必要な情報の収集

acUpgradeTool を実行する前に、Campaign インストール済み環境に関する以下の情報を収集します。

- Marketing Platform インストール・ディレクトリーの絶対パス (setenv ファイル内の UNICA_PLATFORM_HOME)。 Campaign とは別のマシンに Marketing Platform がインストールされている場合は、UNICA_PLATFORM_HOME パスではなく CAMPAIGN_HOME パスを指定してください。
- Campaign インストール・ディレクトリーの絶対パス (setenv ファイル内の CAMPAIGN_HOME)。
- 複数のパーティションをアップグレードする場合は、アップグレードするパーティションの名前
- ターゲット Campaign システムの接続情報 (URL およびポート)
- 接続タイプ (WebLogic または JDBC) および JAR ファイルの場所
- JDBC ドライバーの Java クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ (ある場合)
- ターゲット・システム・テーブル・データベースのユーザー名とパスワード
- ターゲット・システム・テーブルのカatalog (またはデータベース)
- ターゲット・システム・テーブルのスキーマ
- アップグレード前の Campaign のバージョン
- Campaign 構成ファイル (campaign_configuration.xml) の絶対パスまたは相対パス。このファイルは、Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリーにあります。

アップグレード・ログについて

アップグレード・ツール (acUpgradeTool) は、処理に関する詳細、警告、およびエラーをログに書き込みます。アップグレード・ツールを実行する前に setenv スクリプト・ファイルを編集することにより、ログ・ファイルの場所と冗長レベルを調整できます。setenv ファイルはアップグレード・ツールと同じフォルダーにあります。

デフォルトでは、ログの名前は ac_upgrade.log で、Campaign インストール・ディレクトリーの logs フォルダーにあります。

アップグレード・ログで警告およびエラーを確認し、すべてのエラーを修正してから、アップグレードを完了してください。

注: 同じ場所には、CHRH.log も生成されます。このログ・ファイルは、サイズが 0 KB なので、無視して構いません。

パーティションのアップグレードについて

複数のパーティションがある場合は、それぞれのパーティションに対してアップグレード・ツールを 1 回実行します。

Campaign 9.x アップグレード・ツールの実行

アップグレード・ツール (**acUpgradeTool**) は、Campaign システム・テーブルを更新するとともにユーザー・データを変更して、新しいバージョンの Campaign と連動するようにします。

アップグレード・ツールを正常に実行するためには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- アップグレード・ツールが必要とする情報を使用して 9.0 `setenv` ファイルをカスタマイズします。 83 ページの『Campaign 9.x の環境変数の設定』を参照してください。
- アップグレード・ツールは、それらが実行されるシステムにインストールされなければなりません。セットアップが分散されている場合、これらのツールを、Campaign Web アプリケーションがインストールされているシステムにインストールする必要があります。Campaign のインストール時にアップグレード・ツールをインストールしなかった場合は、インストーラーを再度実行して、「アップグレード・ツール」 オプションのみ選択してください。
- Campaign システム・テーブルのデータ・ソース用の該当するデータベース・クライアント実行可能ファイル (`db2`、`osql`、または `sqlplus`) は、アップグレード・ツールを実行するユーザーの `PATH` でアクセス可能でなければなりません。
- 次のステップを完了するまでは、アップグレード・ツールを実行しないでください。Campaign インストーラーをアップグレード・モードで実行し、Campaign を再配置し、eMessage を使用する場合は `RCT` を再始動し、必要に応じて `SQL` スクリプトを変更し、ツールを実行するときに入力する情報を収集します。

前提条件をすべて満たしたら、アップグレード・ツールを実行してアップグレード・プロセスを完了することができます。

複数のパーティションがある場合は、それぞれのパーティションに合わせてアップグレード・ツールを構成し、各パーティションに対して 1 回実行する必要があります。

アップグレード・ツールを実行してアップグレード・プロセスを完了するには、以下のようにします。

1. ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーおよび IBM EMM Web アプリケーションを始動します。
2. ソース・システムとターゲット・システム上の Campaign リスナーを次のようにして停止します。
 - UNIX の場合は、次のコマンドを `root` として実行します。

```
./rc.unica_ac stop
```

- Windows の場合は、Campaign `bin` ディレクトリーに移動して、次のコマンドを実行します。

```
svrstop -p 4664
```

また、実行されている可能性のある Campaign ユーティリティー (`unica_*`) をすべて停止します。手順については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

3. Campaign をインストールしたパスにあるアップグレード・ツール (/tools/upgrade/8.5+To9.0/acUpgradeTool) を実行します。

要求される情報をプロンプトで入力し、新規バージョンの Campaign 用にシステム・テーブルをアップグレードします。

ツールが正常に完了したら、アップグレード・プロセスは完了です。

4. Campaign リスナーを次のようにして再始動します。
 - Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の bin ディレクトリーにある **cmpServer.bat** を実行します。
 - UNIX の場合は、**./rc.unica_ac start** コマンドを root として実行します。

付録 A. IBM ユーティリティー

このセクションでは、Campaign をインストールするときに使用しなければならない可能性があるユーティリティーについて説明します。

Campaign にも、複数の管理ユーティリティーが組み込まれています。これらのユーティリティーについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーについて

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティーの概要を説明します。この説明には、ユーティリティーのすべてに適用される詳細が含まれます。これらの詳細は、個々のユーティリティーの説明には記載しません。

ユーティリティーの場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストおよび説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを提供します。

- 91 ページの『configTool ユーティリティー』 - 製品の登録を含め、構成設定をインポート、エクスポート、および削除します。
- 95 ページの『alertConfigTool ユーティリティー』 - IBM EMM 製品のアラートおよび構成を登録します。
- 95 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティー』 - データ・フィルターを作成します。
- 97 ページの『encryptPasswords ユーティリティー』 - パスワードを暗号化して保管します。
- 98 ページの『partitionTool ユーティリティー』 - パーティションのデータベース・エントリーを作成します。
- 100 ページの『populateDb ユーティリティー』 - Marketing Platform データベースにデータを追加します。
- 101 ページの『restoreAccess ユーティリティー』 - platformAdminRole 役割を持つユーザーを復元します。
- 103 ページの『scheduler_console_client ユーティリティー』 - トリガーを listen するように構成されている IBM EMM スケジューラー・ジョブをリストし、開始します。

Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーの実行に関する前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、そのユーティリティーが置かれているディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリー) から実行します。
- UNIX でのベスト・プラクティスは、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでユーティリティーを実行することです。別のユーザー・アカウントでユーティリティーを実行する場合は、`platform.log` ファイルに設定されたアクセス許可を調整して、そのユーザー・アカウントがこのファイルに書き込めるようにします。アクセス許可を調整しなければ、ユーティリティーがログ・ファイルに書き込むことができないため、エラー・メッセージが表示される場合があります。ただし、その場合でもツールは正常に機能します。

接続問題のトラブルシューティング

`encryptPasswords` を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。システム・テーブル・データベースに接続するために、これらのユーティリティーは以下の接続情報を使用します。これらの情報は、インストーラーが Marketing Platform のインストール時に提供された情報を使用して設定します。上記の情報は、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにある、`jdbc.properties` ファイルに保管されています。

- JDBC ドライバー名
- JDBC 接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名が組み込まれます。)
- データ・ソース・ログイン
- データ・ソース・パスワード (暗号化済み)

さらに、これらのユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにある `setenv` スクリプト、またはコマンド・ラインのいずれかで設定される、`JAVA_HOME` 環境変数に依存します。Marketing Platform インストーラーは、この変数を `setenv` スクリプトに自動的に設定しているはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合には、`JAVA_HOME` 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。JDK は Sun バージョンでなければなりません (例えば、WebLogic で使用可能な JRockit JDK であってはなりません)。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字は、エスケープする必要があります。予約文字のリストおよびエスケープする方法については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーでの標準オプション

以下のオプションは、すべての Marketing Platform ユーティリティーで選択可能です。

`-l logLevel`

コンソールに表示されるログ情報のレベルを設定します。オプションは、`high`、`medium`、および `low` です。デフォルトは `low` です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルト・ロケールは en_US です。選択可能なオプションの値は、Marketing Platform が翻訳されている言語によって決まります。ロケールを指定するには、ISO 639-1 および ISO 3166 に従った ICU ロケール ID を使用します。

-h

コンソールに使用法に関する簡単なメッセージを表示します。

-m

コンソールに、このユーティリティのマニュアル・ページを表示します。

-v

コンソールに、実行の詳細を表示します。

configTool ユーティリティ

「構成」ページのプロパティと値は、Marketing Platform システム・テーブルに格納されます。configTool ユーティリティは、構成設定を Marketing Platform システム・テーブルにインポート、またはそこからエクスポートします。

configTool をいつ使用するか

以下の理由で configTool を使用することがあります。

- Campaign に付属のパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。このテンプレートは、「構成」ページを使用して変更したり複製したりできます。
- 製品インストーラーが自動的にプロパティをデータベースに追加できない場合に、IBM EMM 製品を登録 (構成プロパティをインポート) する。
- バックアップ用、または IBM EMM の他のインストール済み環境へのインポート用に、XML バージョンの構成設定をエクスポートする。
- 「**カテゴリの削除**」リンクがないカテゴリを削除する。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートしてから、カテゴリを作成する XML を手動で削除し、configTool を使用して編集済み XML をインポートします。

重要: このユーティリティは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの usm_configuration テーブルと usm_configuration_values テーブルを変更します。これらのテーブルには、構成プロパティとそれらの値が入っています。最良の結果を得るため、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、または configTool を使用して既存の構成をエクスポートし、その結果得られたファイルをバックアップします。こうして、configTool を使用してインポートする際に誤りがあった場合でも構成を復元することができます。

有効な製品名

configTool ユーティリティでは、このセクションで後述する、製品の登録と登録抹消を行うコマンドで、製品名をパラメーターとして使用します。IBM EMM の 8.0.0 リリースでは、多くの製品名が変更されました。しかし、configTool で認識される名前は変更されませんでした。configTool で使用するための有効な製品名を、現在の製品名と共に以下にリストします。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
Digital Analytics for On Premises	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o]
```

```
configTool -u productName
```

コマンド

-d -p "elementPath"

構成プロパティ階層内のパスを指定して、構成プロパティとそれらの設定を削除します。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらを取得するには、「構成」ページに移動し、対象のカテゴリまたはプロパティを選択し、右ペインで括弧内に表示されているパスを確認します。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドを使用して削除できるのは、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリとプロパティのみです。アプリケーション全体の登録を抹消するには、-u コマンドを使用してください。

- 「構成」ページで「**カテゴリーの削除**」リンクがないカテゴリーを削除するには、`-o` オプションを使用してください。

`-i -p "parentElementPath" -f importFile`

指定された XML ファイルから、構成プロパティとそれらの設定をインポートします。

インポートするには、親要素へのパスを指定します。この親要素の下に、カテゴリーがインポートされます。configTool ユーティリティーは、パスに指定されたカテゴリーの下にプロパティをインポートします。

最上位より下のいずれのレベルでもカテゴリーを追加できますが、最上位カテゴリーと同じレベルではカテゴリーを追加できません。

親要素パスでは、カテゴリーとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらを取得するには、「構成」ページに移動し、対象のカテゴリーまたはプロパティを選択し、右ペインで括弧内に表示されているパスを確認します。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

tools/bin ディレクトリーからのインポート・ファイルの相対位置を指定できます。あるいは、ディレクトリーの絶対パスを指定できます。相対パスを指定するか、またはパスを指定しない場合、configTool はまず、tools/bin ディレクトリーからの相対位置にあるファイルを探します。

デフォルトではこのコマンドで既存のカテゴリーは上書きされませんが、`-o` オプションを使用して強制的に上書きすることができます。

`-x -p "elementPath" -f exportFile`

指定された名前の XML ファイルに、構成プロパティとそれらの設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティをエクスポートできます。あるいは、構成プロパティ階層内のパスを指定することで、特定のカテゴリーに限定してエクスポートすることもできます。

要素パスでは、カテゴリーとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらを取得するには、「構成」ページに移動し、対象のカテゴリーまたはプロパティを選択し、右ペインで括弧内に表示されているパスを確認します。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーからのエクスポート・ファイルの相対位置を指定できます。あるいは、ディレクトリーの絶対パスを指定できます。ファイル指定に区切り文字 (Unix では / Windows では \ または ¥) が含まれない場合、configTool は Marketing Platform インストール済み環境下の tools/bin ディレクトリーにファイルを書き込みます。xml 拡張子を付けなかった場合、configTool がそれを付加します。

`-r productName -f registrationFile`

アプリケーションを登録します。登録ファイルの場所は、tools/bin ディレクトリーからの相対位置か、絶対パスにすることができます。デフォルトではこのコマンドで既存の構成は上書きされませんが、`-o` オプションを使用して強制的に上書きすることができます。`productName` パラメーターは、上記にリストされたものの 1 つでなければなりません。

次のことに注意してください。

- `-r` オプションを使用する場合、登録ファイルには XML 内の 1 番目のタグとして `<application>` が含まれていなければなりません。

Marketing Platform データベースへの構成プロパティーの挿入に使用できる他のファイルが、製品と共に提供されることがあります。それらのファイルについては、`-i` オプションを使用します。`<application>` タグが 1 番目のタグとして含まれるファイルのみ、`-r` オプションと共に使用できます。

- Marketing Platform の登録ファイルは `Manager_config.xml` という名前で、1 番目のタグは `<Suite>` です。新規インストールでこのファイルを登録するには、「IBM Marketing Platform インストール・ガイド」に説明されているように `populateDb` ユーティリティーを使用するか、または Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 初回インストールの後、Marketing Platform 以外の製品を再登録するには、`configTool` を `-r` オプションおよび `-o` と共に使用して、既存のプロパティーを上書きします。

`-u productName`

`productName` によって指定されたアプリケーションの登録を抹消します。製品カテゴリーへのパスを含める必要はありません。製品名で十分です。`productName` パラメーターは、上記にリストされたものの 1 つでなければなりません。これにより、製品のすべてのプロパティーと構成設定が削除されます。

オプション

`-o`

`-i` または `-r` と共に使用すると、既存のカテゴリーまたは製品の登録 (ノード) が上書きされます。

`-d` と共に使用すると、「構成」ページで「**カテゴリーの削除**」リンクがないカテゴリー (ノード) を削除できます。

例

- Marketing Platform インストール済み環境下の `conf` ディレクトリーに置かれた `Product_config.xml` という名前のファイルから、構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートの 1 つを、デフォルトの Campaign パーティションである `partition1` にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレートである `OracleTemplate.xml` が、Marketing Platform インストール済み環境下の `tools/bin` ディレクトリーに置かれているとします。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f
OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を、D:¥backups ディレクトリーに置かれた myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- 既存の Campaign パーティション (データ・ソース・エントリーを伴う) をエクスポートし、partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存し、Marketing Platform インストール済み環境下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f
partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform インストール済み環境下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーに置かれた、app_config.xml という名前のファイルを使用して、productName という名前のアプリケーションを手動で登録し、このアプリケーションの既存の登録を強制的に上書きします。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- productName という名前のアプリケーションを登録解除します。

```
configTool -u productName
```

alertConfigTool ユーティリティー

通知タイプは各種 IBM EMM 製品に固有です。 alertConfigTool ユーティリティーを使用して通知タイプを登録します。インストールまたはアップグレード時にインストーラーが通知タイプの登録を自動的に行わなかった場合に使用します。

構文

```
alertConfigTool -i -f importFile
```

コマンド

-i -f importFile

指定された XML ファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml という名前のファイルから、アラートと通知のタイプをインポートします。

```
alertConfigTool -i -f Platform_alerts_configuration.xml
```

datafilteringScriptTool ユーティリティー

datafilteringScriptTool ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブル・データベース内のデータ・フィルター・テーブルにデータを追加します。

XML をどのように作成するかによって、このユーティリティーは 2 つの方法で使用できます。

- XML 要素の 1 つのセットを使用して、フィールド値の固有の組み合わせを基に、データ・フィルターを自動生成できます (固有の組み合わせごとに、1 つのデータ・フィルター)。
- XML 要素のわずかに異なるセットを使用して、ユーティリティーが作成する各データ・フィルターを指定できます。

XML の作成について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

どのような場合に `datafilteringScriptTool` を使用するか

新しいデータ・フィルターを作成するときには、`datafilteringScriptTool` を使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform が配置され、実行されている必要があります。

SSL での `datafilteringScriptTool` の使用

Marketing Platform が片方向 SSL を使用して配置されている場合は、`datafilteringScriptTool` スクリプトを変更して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイル名およびパス
- トラストストアのパスワード

テキスト・エディターで、`datafilteringScriptTool` スクリプト (`.bat` または `.sh`) を開き、以下のような行を見つけます (Windows バージョンの例です)。

```
:call exec
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

これらの行を、以下のように編集します (新しいテキストは太字になっています)。`myTrustStore.jks` および `myPassword` を、ご使用のトラスストアのパスとファイル名およびトラスストアのパスワードで置き換えます。

```
:call exec
```

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="C:\security\myTrustStore.jks"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"  
%SSL_OPTIONS%
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

```
datafilteringScriptTool -r pathfile
```

コマンド

```
-r path_file
```

指定された XML ファイルからデータ・フィルター仕様をインポートします。ファイルがインストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにない場合、`path_file` パラメーターにパスを指定して二重引用符で囲みます。

例

- `C:\unica\%xml` ディレクトリーにある `collaborateDataFilters.xml` という名前のファイルを使用して、データ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:\unica\%xml\collaborateDataFilters.xml"
```

encryptPasswords ユーティリティー

`encryptPasswords` ユーティリティーは、Marketing Platform が使用する以下の 2 つのパスワードのいずれかを暗号化し、保管するために使用します。

- Marketing Platform がそのシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。ユーティリティーは、既存の暗号化されたパスワード (Marketing Platform インストール済み環境の `tools\bin` ディレクトリーにある、`jdbc.properties` ファイルに保管されています) を新しいパスワードで置き換えます。
- Marketing Platform が、Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーに付属のデフォルトの証明書以外の証明書を使って SSL を使用するように構成されている場合に使用する鍵ストア・パスワード。この証明書は、自己署名証明書または認証局からの証明書のいずれかです。

どのような場合に encryptPasswords を使用するか

`encryptPasswords` は、次のような目的で使用します。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベースにアクセスするために使用するアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成したか、認証局から証明書を入手した場合。

前提条件

- `encryptPasswords` を実行する前に、新しいデータベース・パスワードを暗号化および保管して、`jdbc.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにあります。
- `encryptPasswords` を実行して鍵ストアのパスワードを暗号化し、保管するには、デジタル証明書を作成または入手して、鍵ストアのパスワードを知っておかなければなりません。

その他の前提条件は、89 ページの『Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

```
encryptPasswords -d databasePassword
```

```
encryptPasswords -k keystorePassword
```

コマンド

-d *databasePassword*

データベース・パスワードを暗号化します。

-k *keystorePassword*

鍵ストア・パスワードを暗号化して、`pfile` という名前のファイルに保管します。

例

- Marketing Platform のインストール時に、システム・テーブル・データベース・アカウントのログインは、`myLogin` に設定されていました。インストールしてからしばらく経った今、このアカウントのパスワードを `newPassword` に変更しました。以下のように `encryptPasswords` を実行して、データベース・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```

- SSL を使用するように IBM EMM アプリケーションを構成しています。デジタル証明書は、既に作成または入手しました。以下のように `encryptPasswords` を実行して、鍵ストア・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool ユーティリティー

パーティションには、Campaign のポリシーおよび役割が関連付けられます。これらのポリシーと役割、およびそれぞれのパーティションとの関連付けは、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。partitionTool ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルにパーティションに関する基本ポリシーおよび役割情報のシードを行います。

どのような場合に partitionTool を使用するか

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、Marketing Platform システム・テーブルへの基本ポリシーおよび役割情報のシードを行います。

Campaign に複数のパーティションをセットアップする方法については、お使いのバージョンの Campaign のインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

スペースが含まれるパーティションの説明またはユーザー、グループ、あるいはパーティションの名前は、二重引用符で囲む必要があります。

その他の制約事項については、89 ページの『Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

```
partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u  
admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]
```

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用できます。

-c

-s オプションを使用して指定された既存のパーティションのポリシーおよび役割を複製し、**-n** オプションを使用して指定された名前を付けます。c では、これらのオプションの両方が必須です。このコマンドは以下の操作を行います。

- Campaign の管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方で、管理役割を持つ新規 IBM EMM ユーザーを作成します。指定するパーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新しい管理ユーザーをそのグループのメンバーにします。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成します。
- ソース・パーティションに関連付けられたすべてのポリシーを複製し、これらのポリシーを新しいパーティションに関連付けます。
- 複製されたポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられたすべての役割を複製します。
- 複製された役割ごとに、ソース役割でマップされていたように、すべての機能をマップします。
- 新規 Marketing Platform グループを、役割の複製中に作成されたシステム定義の最新の管理役割に割り当てます。デフォルトのパーティションである `partition1` を複製する場合、この役割はデフォルト管理役割 (Admin) となります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。-list コマンドの出力に表示する説明を指定します。256 文字以内でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は、二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。ユーティリティーが作成する Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

名前が定義されない場合のデフォルトは、`partition_nameAdminGroup` です。

-n *partitionName*

-list ではオプション、-c では必須です。32 文字以内でなければなりません。

-list で使用する場合、情報をリストするパーティションを指定します。

-c で使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定するパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、そのパーティションを (「構成」 ページでパーティション・テンプレートを使用して) 構成したときにパーティションに指定した名前と一致する必要があります。

-s sourcePartition

必須。-c との組み合わせでのみ使用します。複製するソース・パーティションの名前です。

-u adminUserName

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。複製されたパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

名前が定義されない場合のデフォルトは、*partitionNameAdminUser* です。

パーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 から複製する。
- パーティション名を myPartition にする。
- デフォルトのユーザー名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用する。
- デフォルトのグループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用する。
- 説明を「ClonedFromPartition1」にする。

```
partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
```

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 から複製する。
- パーティション名を partition2 にする。
- ユーザー名を customerA に指定し、partition2 のパスワードを自動的に割り当てる。
- グループ名を customerAGroup に指定する。
- 説明を「PartitionForCustomerAGroup」にする。

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
```

populateDb ユーティリティ

populateDb ユーティリティは、Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト (シード) ・データを挿入します。

IBM インストーラーは、Marketing Platform システム・テーブルに、Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを追加できます。ただし、企業ポリシーがインストーラーによるデータベースの変更を許可しない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合は、このユーティリティーを使用して、Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト・データを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティーの役割および権限が含まれます。Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルトのユーザーとグループ、およびデフォルト・パーティションのセキュリティーの役割および権限が含まれます。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は、Manager (Marketing Platform の場合) および Campaign (Campaign の場合) です。

例

•

Marketing Platform のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Manager
```

•

Campaign のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Campaign
```

restoreAccess ユーティリティー

PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが誤ってロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするすべての機能が失われた場合には、restoreAccess ユーティリティーを使用して、Marketing Platform へのアクセスを復元できます。

どのような場合に restoreAccess を使用するか

このセクションで説明する 2 つの状況では、restoreAccess を使用することをお勧めします。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になった場合

Marketing Platform で PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが、システム内で無効にされる可能性があります。platform_admin ユーザー・アカウントが無効にされる場合の一例を説明します。例えば、PlatformAdminRole 特権を持つユーザ

ー (platform_admin ユーザー) が 1 人しかないとします。「構成」ページで、「全般 | パスワード設定」カテゴリの「許可されるログイン再試行の最大回数」プロパティーが 3 に設定されているとします。この場合に、誰かが platform_admin としてログインを試み、不正なパスワードを 3 回連続して入力したとします。これらのログイン試行の失敗により、platform_admin アカウントはシステム内で無効にされます。

この場合、restoreAccess を使用することで、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを Marketing Platform システム・ユーザーに追加できます。

このようにして restoreAccess を実行すると、ユーティリティーは、指定されたログイン名とパスワード、および PlatformAdminRole 特権を設定したユーザーを作成します。

指定したユーザー・ログイン名が、Marketing Platform 内に内部ユーザーとして存在する場合、そのユーザーのパスワードは変更されます。

ログイン名が PlatformAdmin で、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーのみが、例外なくすべてのダッシュボードを管理できます。したがって、platform_admin ユーザーが無効にされて、restoreAccess を使用してユーザーを作成する場合は、platform_admin のログインを設定したユーザーを作成する必要があります。

Active Directory の統合が不適切に構成されている場合

不適切な構成で Windows Active Directory 統合を実装したことにより、ログインできなくなった場合には、restoreAccess を使用して、ログイン機能を復元します。

このようにして restoreAccess を実行すると、ユーティリティーは「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を「Windows 統合ログイン」から Marketing Platform に変更します。この変更により、ロックアウトされる前に存在していた任意のユーザー・アカウントを使用してログインできるようになります。オプションで、新規ログイン名およびパスワードを指定することもできます。このように restoreAccess ユーティリティーを使用する場合は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用するときには、パスワードに関して次のことに注意してください。

- restoreAccess ユーティリティーは、ブランク・パスワードをサポートしません。また、パスワード規則を強要しません。
- 使用中のユーザー名を指定すると、ユーティリティーはそのユーザーのパスワードをリセットします。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u loginName オプションを指定せずに使用した場合は、「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。変更を適用するには、Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u loginName オプションを指定して使用する場合、PlatformAdminRole ユーザーを作成します。

オプション

-u loginName

PlatformAdminRole 特権および指定したログイン名を持つユーザーを作成します。-p オプションと一緒に使用する必要があります。

-p password

作成するユーザーのパスワードを指定します。-u に必要です。

例

- PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
```

- ログイン方法の値を IBM Marketing Platform に変更し、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
```

scheduler_console_client ユーティリティー

IBM EMM スケジューラーに構成されているジョブがトリガーを listen するようにセットアップされている場合は、このユーティリティーによって、それらのジョブをリストし、開始できます。

SSL が使用可能にされている場合の作業

Marketing Platform Web アプリケーションが SSL を使用するよう構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーで使用されている SSL 証明書と同じ証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには、以下の手順に従います。

- scheduler_console_client によって使用される JRE の場所を特定します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合、この環境変数が指す JRE が、scheduler_console_client ユーティリティーによって使用されるものです。

- JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプト、またはコマンド・ラインのいずれかで設定された JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を、scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

Sun JDK には、証明書をインポートするために使用できる、keytool という名前のプログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法について詳しくは、Java の資料を参照するか、プログラムを実行する際に -help を入力してヘルプにアクセスしてください。

- テキスト・エディターで tools/bin/schedulerconsoleclient ファイルを開き、以下のプロパティーを追加します。これらのプロパティーは、Marketing Platform がどの Web アプリケーション・サーバーに配置されているかに応じて異なります。
- WebSphere の場合は、以下のプロパティーをファイルに追加します。

-Djavax.net.ssl.keyStoreType=JKS

-Djavax.net.ssl.keyStore="鍵ストア JKS ファイルへのパス"

-Djavax.net.ssl.keyStorePassword="鍵ストアのパスワード"

-Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"

-Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"

-DisUseIBMSSLSocketFactory=false

- WebLogic の場合は、以下のプロパティーをファイルに追加します。

-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"

-Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"

-Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"

証明書が一致しないと、Marketing Platform ログ・ファイルに以下のようなエラーが記録されます。

原因: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: 要求されたターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target)

前提条件

Marketing Platform がインストールされ、配置され、実行されている必要があります。

構文

```
scheduler_console_client -v -t trigger_name user_name
```

```
scheduler_console_client -s -t trigger_name user_name
```

コマンド

-v

指定されたトリガーを listen するように構成されているスケジューラー・ジョブをリストします。

-t オプションと一緒に使用する必要があります。

-s

指定されたトリガーを送信します。

-t オプションと一緒に使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーに構成されている、トリガーの名前。

例

- trigger1 という名前のトリガーを listen するように構成されているジョブをリストします。

```
scheduler_console_client -v -t trigger1
```

- trigger1 という名前のトリガーを listen するように構成されているジョブを実行します。

```
scheduler_console_client -s -t trigger1
```

RCT スクリプト

レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を実行し、その状況を確認するには、このスクリプトを使用します。

このスクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。eMessage ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内にあるサブディレクトリーです。

UNIX または Linux 環境では、このスクリプトを `rct.sh` として実行します。

Windows では、このスクリプトをコマンド・ラインから `rct.bat` として実行します。

構文

```
rct [ start | stop | check ]
```

コマンド

start

RCT を始動します。

stop

RCT を停止します。

オプション

check

RCT と IBM EMM Hosted Services との接続状況を確認します。

例

- Windows で RCT を始動するには、以下を実行します。

```
rct.bat start
```

- Windows で RCT を停止するには、以下を実行します。

```
rct.bat stop
```

- Linux 環境では、RCT が IBM EMM Hosted Services に接続されているかどうかを判別するには、以下を実行します。

```
rct.sh check
```

システムの状況に応じて、このコマンドの出力は以下のような内容になります。

```
C:¥<EMM_HOME>¥Campaign¥eMessage¥bin>rct check
Testing config and connectivity for partition partition1
Succeeded | Partition: partition1 - Hosted Services Account ID: asm_admin
```

MKService_rct スクリプト

レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) をサービスとして追加または削除するには、このスクリプトを使用します。RCT をサービスとして追加すると、RCT をインストールしたマシンのオペレーティング・システムを再始動するたびに、RCT が再始動されます。サービスとしての RCT を削除すると、RCT は自動的に再始動されなくなります。

このスクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。

UNIX または Linux 環境では、root 権限またはデーモン・プロセスを作成する権限を持つユーザーとして MKService_rct.sh を実行します。

Windows では、このスクリプトをコマンド・ラインから MKService_rct.bat として実行します。

構文

```
MKService_rct -install
```

```
MKService_rct -remove
```

コマンド

-install

RCT をサービスとして追加します。

-remove

RCT サービスを削除します。

例

- RCT を Windows サービスとして追加する場合には、以下を実行します。

```
MKService_rct.bat -install
```

- UNIX または Linux で RCT サービスを削除するには、以下を実行します。

```
MKService_rct.sh -remove
```


付録 B. IBM Campaign のフェイルオーバー構成

Campaign Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントおよびバックエンド・サーバー・コンポーネントを、フェイルオーバーをサポートするように構成できます。

用語の定義

コンポーネント	インストール・オプション	定義
Campaign Web アプリケーション・サーバー	J2EE アプリケーション	Campaign ユーザー・インターフェースを提供する Web アプリケーション。
Campaign バックエンド・サーバー	Campaign サーバー	フローチャートの設計と実行をサポートする起動スクリプトおよびコンポーネント。

Campaign Web アプリケーション・サーバー・コンポーネント

Campaign Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントは、ロード・バランス Web アプリケーション環境をサポートしていません。ただし、スタンバイ・サーバーを使用して、Web アプリケーション・サーバーの障害に対処するように環境を構成できます。Campaign のスタンバイ Web アプリケーション・サーバーへの切り替えプロセスについて、以下で説明します。

Campaign では、ユーザー・インターフェースでの応答時間を向上させるために、オファーなどの特定のオブジェクトは Web アプリケーション・サーバーでキャッシュされます。ロード・バランス環境では、Web アプリケーション・サーバーで作成されたオファーが、別のサーバーを介してセッションに接続するユーザーに対して、すぐには使用可能にならないことがあります。この問題を回避するために、Campaign はロード・バランス構成をサポートしていません。

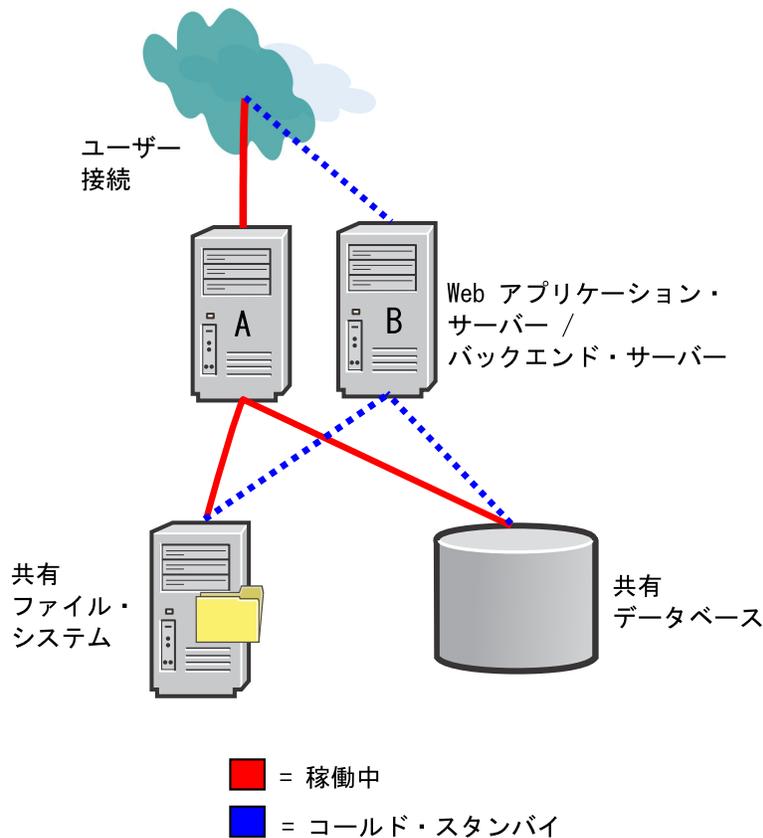
キャッシュされるオブジェクトとしては、オファー、オファー・テンプレートとオファー属性、キャンペーン、セッション、フォルダー、属性、イニシアチブ、セグメントがあります。キャッシュがリフレッシュされる頻度は、Campaign キャッシュ構成設定 (offerTemplateDataTTLSeconds など) を調整することによって構成できます。ただし、この調整はパフォーマンスに影響を与える恐れがあります。構成設定についての説明が、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」に記載されています。

スタンバイ・サーバーを備えた構成を使用することにより、Web アプリケーション・サーバーの障害が発生した場合に、アプリケーション可用性の中断を最小限に抑えることができます。Campaign システム・テーブルは外部データベースに格納されるので、スタンバイ・サーバーにデータを複製する必要はありません。プライマリー Web アプリケーション・サーバーで障害が起こった場合は、スタンバイ・サーバーで Campaign Web アプリケーションを開始されなければなりません。開始された Campaign Web アプリケーションは、Campaign システム・テーブル・データベースからすべての現行データを取得します。

Campaign バックエンド・サーバー・コンポーネント

推奨構成は、2 つの別個の Campaign サーバー (1 つは「ホット」、1 つは「コールド」) から成ります。単一のバックエンド・サーバーに複数の Web アプリケーション・サーバーがアクセスできるようにすることは、パフォーマンスに影響を与える恐れがあるため、推奨されません。(パフォーマンス上の理由で) Web アプリケーション・サーバーとバックエンド・サーバーの間に 1 対 1 の関係があることを前提とした場合、別々のマシンにサーバーを置くと障害点が増えることとなります。1 つを Web アプリケーション専用のサーバーにし、1 つをバックエンド・サーバー用にする利点は、両方を適切にチューニングできることにあります。Web アプリケーション・サーバーが他の Web アプリケーションのためにも使用される場合は、バックエンド・サーバーが Web アプリケーション・サーバーにパフォーマンス上の影響を与えるのを避けるために、別個のバックエンド・サーバーを使用することを検討してください。この決定はケース・バイ・ケースで行う必要があります。多くの場合、実装計画の一部になります。

次の図は、推奨構成を示しています。



この構成には、次のように、IBM Campaign 以外の依存項目がいくつか含まれています。

- ファイル・システムとデータベースは共有されて高可用性でなければなりません。この要件を達成するには、ファイル・システム・アプライアンスや RAID、データベース・ベンダー・ソリューションなど、いくつかのアプローチがあります。しかし、これらのテクノロジーの高可用性は、IBM Campaign アプリケーションの範囲外です。

- 共有ファイル・システムは、サーバー A および B にマウントされなければなりません。Campaign では、予期される特定のパーティション・ディレクトリー構造内にルート・ノードが存在する必要があるためです。
- コールド・フェイルオーバーをサポートするには、以下の処理を行うための追加ソフトウェア (カスタムまたは商品) が必要です。
 1. Campaign バックエンド・サーバーの「ハートビート」を検査する。
 2. 障害が発生した場合に 1 次 バックエンド・サーバーを停止する (該当する場合)。
 3. 障害が発生した場合に 2 次 バックエンド・サーバーを開始する。
 4. 1 次バックエンド・サーバーから 2 次バックエンド・サーバーに Web 層要求をリダイレクトする。

付録 C. IBM 製品のアンインストール

以下を行うときに、IBM 製品をアンインストールしなければならない場合があります。

- システムの廃棄。
- システムからの IBM 製品の削除。
- システムでのスペースの解放。

IBM EMM 製品をインストールすると、アンインストーラーが `Uninstall_Product` ディレクトリーに組み込まれます。ここで、`Product` は IBM 製品の名前です。Windows の場合、「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」リストにも項目が追加されます。

IBM アンインストーラーを実行すると、すべての構成ファイル、インストーラー・レジストリー情報、ユーザー・データがシステムから削除されます。アンインストーラーを実行するのではなくインストール・ディレクトリー内のファイルを手動で削除すると、同じ場所に IBM 製品を後ほど再インストールする場合にインストール結果が不完全なものになる可能性があります。製品アンインストールの後でも、データベースは削除されません。アンインストーラーはインストール中に作成されたデフォルト・ファイルのみを削除します。インストール後に作成または生成されたどのファイルも削除されません。

IBM 製品をアンインストールするには

システムから IBM 製品を適切に除去するには、以下の説明に従ってください。

注: UNIX の場合、IBM EMM をインストールしたのと同じユーザー・アカウントによってアンインストーラーを実行する必要があります。

1. IBM 製品に Web アプリケーションがデプロイされている場合、WebSphere または WebLogic から IBM EMM 製品 Web アプリケーションをアンデプロイします。
2. WebSphere または WebLogic をシャットダウンします。
3. 削除する製品に関連した実行中のプロセスをすべて停止します。

例えば、Campaign または Contact Optimization リスナー・サービスは、これらの製品をアンインストールする前に停止します。

4. 製品インストール・ディレクトリーに `ddl` ディレクトリーがあるかどうか確認し、あればそこに用意されているスクリプトを実行してシステム・テーブル・データベースからテーブルをドロップできます。
5. IBM EMM アンインストーラーを実行し、ウィザードの指示に従います。

アンインストーラーは、`Uninstall_Product` ディレクトリーにあります。`Product` は、ご使用の IBM EMM 製品の名前を表します。`Uninstall_Product` ディレクトリーは製品のインストール・ディレクトリーにあります。

不在モードでインストールされた製品をアンインストールする場合、アンインストールも不在モード実行されます (ユーザー対話のためのダイアログは表示されません)。

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントでログインする必要があります。可能な場合、このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。アカウントを IBM 顧客番号に関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的な事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用について詳しくは、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan